

---

# エウロパの時間

冴木よしえ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エウロパの時間

### 【Nコード】

N6743A

### 【作者名】

冴木よしえ

### 【あらすじ】

22世紀の地球。地球上の温度の上昇により、他の星に移り住むようになった人類。アンダーグラウンドエイジアという地球上の企業が、木星の衛星「ガニメデ」で人類が住めるように開発を進めていた。ガニメデへの飛行を迎えた新人6人。そして、彼らに待ち受けていた重なるトラブルと迫られる選択。それは、21世紀から回り始めていた悲しい運命の歯車。あなたは、遠い未来に生きてまで、長生きしたいですか？

コンクリートの熱を背中に感じていた。視界には、聳え立つロケットと、青い空。久しぶりに地上に出てきたら、猛烈な太陽が迎ええてくれた。

明日にはあの白いロケットに乗り、エウロパまで探査に出る。この青い空、灼熱の太陽とはもう会えないような気がした。不快に思うこの熱い空気も日光も、身体全身で感じておきたい。

青年は、コンクリートに手足を投げ出し、仰向けに横たわっていた。足元には、もう一人青年が座っていた。明日、一緒に飛び立つ者だった。

「絶対、地球に帰って来よう」

足元から聞こえる声に、ぼんやりと頷く。

百年以上に渡る物語の歯車は、ここから回り始めていた。

二十一世紀終盤。まだ人工大気圏が完成していない氷の星エウロパでは、コロニー内で宇宙開発が行われていた。その中でも一番大きなコロニーの中では、秘密裏にある作業が行われていた。白い蒸気の立ち上る円柱の透明な容器から、無数のケーブルが延びている。高さ二メートル、直径六十センチのその円柱の中には、一人の人間が眠りにつこうとしていた。

「四十年後、また会おう」

震える指でスイッチを押すと、透明な容器の表面はみるみる白くなり、中の人間が確認できないほどに不透明になった。円柱の容器の前には、銀色のプレートが貼られていた。

『未来の科学者に託す 現代の最高の頭脳 ここに眠る』

朽ちたコンクリートの塊に、容赦なく太陽光が照り付けていた。

ここは日本という国の新宿という街だった所。水深五メートルの海水からコンクリートが生えている。二十世紀に「都庁」と呼ばれたコンクリートの塊が、大きな作業用のロボットによって、壊されていた。辺りには同じようなコンクリートの塊が多数存在する。無論、どれも機能はしていない。

二十世紀に温暖化現象が問題になっていたそうだが、二十一世紀が終わる頃には、地球上で暮らせるような状態ではなかった。赤道直下での温度は常に六十度。北極点、南極点でも四十度を越す温度を記録していた。高温によって溶け出した、北極、南極の氷は、大量の水となって地球上を覆い、二十世紀に栄えた都市をすべて飲み込んだ。が、人類は二十一世紀半ばから、居住地を地下や、標高の高い場所へと移し、人類絶滅の危機から逃れた。しかし、そんな場所にも限界があり、人類は新たな拠点に向けて準備を始めた。

そして、二十二世紀を迎えた今、人類は「地球地下」「火星」に住むようになり、近年新たに、木星の衛星「ガニメデ」「エウロパ」への移住計画が進んでいた。

ガニメデの開発に携っている「アンダーグラウンドエイジア」では、科学者、技術者たちが、次の飛行の準備をしていた。ガニメデの人工大気圏は完成しており、これからは滞在テストなどが繰り返される。

翌々日に控えたガニメデへの飛行は、新人六人で行うことになっていた。初飛行となる六人は、綿密なスケジュールのもと、飛行テストや体調管理を行っていた。その中の女性二人がオレンジ色の恒温服に身を包み、灼熱の地上で散歩していた。恒温服は、五十度を超える太陽光を浴びても身体の表面温度を二十五度に保つアンダーグラウンドエイジアで開発された地上用の服である。

「この服ね、髪の毛がペシャってなるから、やなの！」

小さいほうの女性が頭を覆っている透明な部分をコツコツと叩く。  
「仕方ないじゃない。それ取ったら、髪がペシャってなるところか、燃えてなくなるよ」

「頭の部分には、涼しい風が流れるように作ってくればいいのに」

「ウサが開発すればいいじゃん？女性にウケるよ、きっと」

ウサと呼ばれた小さな女性は、頬を思いつきり膨らまして足を踏み鳴らした。四、五歳の子供がやるような仕草である。

「やだもん！ ウサはコンピュータしか扱えないもん。あ、開発室にお友達のおじさんがいるから、お願いしてみようかな。ヒロミは、これから何処行く？ ウサは開発室に行つて来る！」

「いいよ。行つておいで。私は、一回部屋に戻ってから食堂に行くよ」

ウサはひらひらと手を振つて、アンダーグラウンドエイジアのメインビルに走つて行つた。

「あれで、二十四歳だもんね。世も末だよ、ホント」

ヒロミのつぶやきは、もちろんウサには届かなかった。

メインビルに入ったウサは、突然腕を引っ張られて受付の方に引き寄せられた。

「なにっ！ なにっ？」

「僕だよ僕！ シゲだよ。静かにして。なんかね、ロビーのソファーの方で不審な話し声がするからさ。クボがソファで寝てるんだよね。大丈夫かな？」

「じゃ、助けに行かなきゃ！」

ウサはシゲの手を振り解いて、ソファの方に走っていった。

「クボ！ クボクボ！ 大丈夫？」

クボに近づいたウサは、肩を掴んで揺すって起こした。

「え、何？ あ…ウサ？ うん、何？」

首をしきりに掻きながら、クボは立ち上がった。

「シゲがね、ここで変な声聞いたって。大丈夫だった？」

口をパクパク動かしながら、三十センチも大きなクボを見上げて、ウサが心配そうに眉を寄せている。

「ねえ？ 大丈夫？」

「え？ あ、うん…。シゲもいるの？」

少し汗を滲ませて辺りを見回した。手は首の後ろを押さえたままである。視線を受付に動かした時に、パーティションの後ろからシゲが顔を出した。

「今、言い争うような声がしたんだが」

クボとシゲが辺りを見回しても、辺りには三人以外にはいなかった。

「変だね。クボ独り言言ってたの？」

ウサは、手首にある黄色いボタンを押した。音も無く、頭を覆っていた透明のカバーが襟元に格納される。そして、ソファに座りながら言った。

「なんか気持ち悪いなあ。クボ、何も見なかったの？」

クボが煙草を胸ポケットから出しながら、また首を掻いた。

「虫にでも刺されたのか？」

シゲがその様子を見ながら聞いた。

「いや、ちよつと痒いだけ。膨れてないし」

「何かに感染でもしたら、出発できないからな。お前じゃなくて、補欠クルーと一緒に御免だから」

「ああ、注意するよ」

「あー！」

その時、ウサが突然大きな声を出して立ち上がった。

「忘れてた」

ウサが身軽に、ジャンプしてソファの後ろに着地すると、北棟に向かって走り出した。

「ウサ、どうした？」

クボが大声で聞いた。しかし、ウサは振り返りもせず、足を止めることもない。

「開発室に行くの！」

その後のウサの声は、ロビーまで届かなかった。

光の届かない北棟は、開発や保存に適しているので、研究室、開発室、訓練室として使われている棟である。湿度、温度とも一定に保たれ、窓がないストレスを感じさせない。一方、南棟は、技術者、研究者、クルーの居住スペースとなっている。透明な窓は過剰な太陽光に含まれる紫外線、赤外線、宇宙線をカットし、程よい光を室内に送り込む。もちろん開放はできない。そして西の玄関からまっすぐに伸びた東棟は、幹部用の個室と数多くのシークレツトルームで成り立っている。通常、東棟への通路は閉ざされていて、カードキーを持った者しか出入りができない。長年ここににいる者でも、シークレツトルームに何があるのか、知る者は少ない。

ウサは北棟に入ってすぐ左手にあるエレベータに乗り込んだ。開発室は北棟の地下一階にある。上に向かって重力を感じると、すぐにエレベータは止まった。エレベータの向かいが目的の部屋である。このフロアにある九部屋はすべて開発室である。それぞれの部屋に二、三人ずつ入り、宇宙生活に必要な物を開発している。今、ウサが着用しているこの恒温服もここで開発された。

「ねえ！ ヒルさんいる？」

ウサは、開発室の扉をノックもせずを開けた。目の前には、色の白いおじさんと少し背の高い青年がコーヒーマシーンを片手に、話をしながら部屋を往復してた。

「ウサちゃん。前に部屋に入るときはノックして入ってって言ったでしょ？」

「ん、そうだったけ？ あ、あのね、この恒温服の開発チームに、ヒルさん入ってたよね？」

「そうだけど？」

ウサの話を聞かない性格に慣れているのか、ヒルと呼ばれた色の白い男性は、目を細めて首を傾げた。



「これね、長時間着てると髪がペシャってなるのね。だから、改造して。」

ヒルは、コーヒを一一口に含むと、にやりと笑った。背の高い青年、ユウセイもくすくす笑った。

「あのね、ウサちゃん。今、人間は地上では生活できないの。移動は、遮光車か、地下通路。どうしてもって場合のために開発したんだよ。長時間着用するには作っていないんだから」

「でも、ウサ、外で遊びたいもん」

「たとえ恒温服を着てても、日光は有害だからね」

「や、作って」

口を真一文字に結んで、ヒルの服の裾を引っ張った。頑固なウサは、こうなってしまうては一步も引かないことをヒルは知っていた。

「はいはい。じゃ、考えておくよ。大量生産はできないよ。長時間地上にいるのを推奨するわけにはいかないからね」

「やった！ ありがとう。試作品ができれば、ウサに最初に連絡しようだね」

「ウサちゃん。自分でもそういうのを開発できるくらい優秀な頭脳を持つてるんでしょ？ 通信なんかにいないで、開発に来たら？ 歓迎するよ」

横で話を聞いていたユウセイが、にこにこしながらウサに近づいた。

「随分前にも一回誘ったよね？ どうして来ないの？ シャトルなんて危ないし。それに、ウサちゃんの素晴らしい能力があんまり幹部に知られると、東棟に隔離されて、ずっと研究をしなきゃいけなくなるかもよ？」

ウサは、ブスツとした表情で首を振った。

「イヤ。ウサは、コンピュータが好きだもん。開発はヒルさんにお任せなの。ウサはマサトとタカと飛びたいの！」

ウサはヒルの飲んでいたコーヒを横から取り、飲み干してから

部屋から出て行った。残されたヒルは、手渡された空になったカッ  
プをぼんやりと眺め、ため息をつく。その横で、ユウセイはウサの  
消えた扉を冷たい視線でじっと見つめていた。

マサトはシャトル発射場から、遮光車でアンダーグラウンドエイ  
ジアに向かっていた。横には、タカが乗っている。

「今晚、最後の身体検査つすよね？」

「ああ。いよいよ出発か」

二日後に飛行を控えた六人は、今晚身体検査をして、明日は最後  
の合同訓練。そして、二日後に飛び立つのだ。そんな中、今日の訓  
練を終えた機関士のマサトは、副機長のタカとともに、整備の具合  
を見に行っていたのだった。

「クボも、俺たちが来る前までシャトル発射場に居たらしいんです  
よ。ここに来る前にロビーですれ違ったんすけど」

マサトは今日、北棟の訓練室で機器の整備方法の確認とシャトル  
の動力室のレプリカで作業訓練をしていた。訓練終了後にタカとロ  
ビーで待ち合わせしていたのでロビーに出て行ったら、丁度駐車場  
からクボが出てきたのだ。

「何をしていたんだろうな。俺たちが今日ここに来ることは言っ  
たんだから、一緒に行ったって良かったのに」

「そうつすよね？ 俺もそう思って、そう言ったんすけど、言葉濁  
してどっか消えちゃったんすよ」

「へえ。珍しいな」

タカは、少し背もたれを倒して伸びをした。クボの様子を特別気  
にするでもなく、別のことを考えていた。

「腹減ったなあ。今日は何を食うかな」

「今日から、ビールは駄目つすよ」

「解ってるよ。もう出発二日前だからなー。でも一杯だけ」

「駄目です！ シゲに言いますよ！」

「シゲも飲みたいはずだよ。筋トレの後は必ずビール飲んでるんだから」

マサトは溜息をついて、ウインカーを出した。左折して、アングラウンドエイジアの敷地内に入る。マサトは、正門の警備の人に軽く挨拶をして、駐車棟の扉を開けてもらった。そして、右折しコンクリートの建物に入った。駐車棟には、十一台駐車できる。空いているスペースは一つしかなかった。目視で確認し終えた頃、後ろで扉の閉まる音がした。

「今日は、車の返却がみんな早いっすねー」

「お前がバッテリーを上げなきゃ、俺たちももつと早く帰れただろーが」

そういつて、タカがマサトの頭を小突いた。

「だって、すぐ帰ると思つて、オンにしといたんすよ。あんなに長く居た、タカが悪いんじゃない」

「電気で走る車なんだから、バッテリーは大事にしるよな！ 常識だろ」

「ひどいつすよー」

口で攻防を繰り返しながら駐車し、車外に出た。ロビーまでの連絡通路は、地下一階にある。階段を下りながら、時計を見ると十七時三十分を過ぎたところだった。

「身体検査の前に夕食が食べれそうだな。マサトも先に行くか？」

「はい。行きます。あ、その前にウサも誘つていいですか？ 今朝一緒に夕ご飯食べようって約束したんすよ」

「ああ。構わないけど。ウサから誘われたんだろ？ あいつ、年下のクルーが傍にいて嬉しいんだな、きっと」

タカはロビーの扉を開けて、マサトを先に通した。

「ここでは、俺が最年少ですもんね。つぎがウサか。どうせ女性では一番年下じゃん」

「女性ねえ」とタカは苦笑した。

「あーっ！ マサト！」

ちょうどその時、噂の女性が北棟からロビーに入ってきた。

「あ、ウサ。これから食堂に行くけど。今大丈夫？」

「うん。大丈夫。まだ、身体検査までに時間あるよね？」

タカは腕時計を見ると、頷いた。

「ああ。十九時からだからな。まだ食べる時間はあるよ。」

「じゃあ、ウサはマサトとご飯に行つて来るね」

「いや、俺も行くから」

マサトと手をつないで食堂に向かうウサに、タカは苦笑しつつも付いて行った。

出発を翌日に控えた、最後の合同訓練。

本番さながらに、離陸までの操作、行動の確認を行うのが今日の訓練だった。半日の訓練の後は、自由時間をもらっている。クルーたちは、その自由時間を心待ちにし、最後の訓練に向かった。

遮光車で、二台に分かれて発射場まで向かった。先頭を走る車には、タカ、マサト、ウサ。後ろの車には、シゲ、クボ、ヒロミが乗っていた。明日、初飛行を迎えた六人である。

後ろを走る車は、クボが運転していた。乗車してから約五分。会話も交わされずに、目的地へ向かっていた。しかしシャトルが見え始めた頃、シゲが口を開いた。

「ガニメデと言えばな 俺の親父もここで働いてたんだ」

「え？ そうだったんだ。今もここにいるの？」

クボが前を向いたまま聞いた。

「いや、死んだんだ。ガニメデで事故に遭った。その話を聞いたのは、事故の一カ月後だったかな。どうも事故を隠していたみたいで。遺体すら帰って来なかった」

クボもヒロミも何と声を掛けていいのか解らず、沈黙が続いた。

「過ぎたことだからな。あまり考えないことにしているんだが。母親が親父の死のショックから立ち直れなかったのか、その半年後に死んだ時には、ここを恨んだなあ。でも、結局俺も同じ道を歩んでる。運命かなあ」

「事故の詳細は聞いてないの？」

クボが、スピードを少し落としてシゲの顔を見た。特別、思いつめたような表情はしていなかった。過去のことと割り切って前向きに生きているのだろうか。

「教えてなんてくれなかったよ。もう、知りたいとも思わないしな。何、シャトルを見てちよつと思ひ出したただけだ。忘れてくれ」

シゲは、照れくさそうに笑って、もう一度シャトルを見た。

ヒロミは、そんなシゲの表情をじっと見ていた。

一方、前を走る車の中は騒々しかった。

「今日はね、ウサね、自由時間は電気街にお買い物に行くの。シゲがね、荷物持ちしてくれるって」

「なんだ。そういうことは、シゲじゃなくても、俺がやるっすよ」

「えー。だって、マサトって細いから重いもの持てなさそう」

「俺だって、力あるっす！ ほら、筋肉あるし！」

マサトは、長袖のシャツを捲って、肩の筋肉を出した。

「ほら、ほら！ ね？」

「それくらいなら、ウサにもあるもん！」

「ウサは、女でしょ？ 俺たち男の筋肉とは違うの！」

「やかましい！ 狭い車で喧嘩すんな！」

タカの一声で静かになった先頭の車両は、ようやく発射場に到着した。整備班がうろろする発射場の一角にある事務所の地下に車を停めて、今回の任務の指揮者であるマツのもとへ向かった。地球

のコントロールセンターより飛行中のシャトルに指示を出したり、ガニメデ到着後の六人の行動を指揮する役割を担っている。

「ごころう。今回の任務は、ガニメデでの滞在テスト、兼、建物建設に必要な資料となる数値を取得して来てもらう。現在向こうにいるクルーと交代する形になる。任務内容はそれぞれ、書類で行き渡っていると思うが。シゲ、質問はないか？」

「はい、特にありません」

マツは頷くと、一呼吸おいて、手元の資料を見た。ここでは、本名の名前で呼ばれることはない。ニックネームのようなコードネームで呼ばれる。

「今回は異例なのだが、全員初飛行となるクルーで構成した。皆、優秀な成績を残したものだから大丈夫だろうという判断だ。まず、機長及び建築士として、シゲ」

「了解」

「続いて、副機長及び測量士として、タカ」

「了解しました」

「次に、操縦士及び地質研究者として、クボ」

「了解」

「機関士及び測量士として、マサト」

「了解です」

「通信士及び電気技術士として、ウサ」

「了解しました」

「衛生士として、ヒロミ」

「はい、了解しました」

全員が神妙な面持ちで返事をする。マツも安心したように、力強く頷き応えた。

「明日の出発までに、緊急事態が起こらない限り、このメンバーで飛んでもらう。では、最後の訓練に向かってくれ」

部屋を出ると、ウサがめずらしく神妙な面持ちで歩いていた。ヒロミがそれに気づくと声をかけた。

「どうしたの、ウサ？」

「正式に任命されちゃったね。電気技術の腕は自信あるよ。でも、通信士として二年ここで訓練してきたけど、大丈夫かなあ？」

「優秀なメンバーで揃えたって言ってたじゃん。大体、ここの通信科の試験を主席でクリアしたんでしょ？」

「そうだけどさあ」

「大丈夫だって。類まれなる優秀なメンバーが揃ってるんだから！」  
ウサはエヘへと笑って、「ウサ天才」と繰り返しながら、シャトルに向かった。

全員が配置についた。円形のコントロールルームにはクルーの席が六個用意されている。全員が背中向きで円の外側を向く形となり、全員の目の前にはさまざまなパネルがあった。進行方向に向かって正面がシゲ。右隣がクボ、その隣にウサ。シゲの左隣にはタカ、その隣にはマサト、その隣にヒロミが配置されていた。

コントロールセンターと通信で打ち合わせするのは、通信士のウサ、操縦士のクボ、そして機長のシゲがメインとなる。そして、他のものは、機長の指示に従って動くことになるのだ。

『訓練、訓練。こちらコントロールセンター。機長、そちらの準備は出来たか？』

「訓練、訓練。こちらシャトル。打ち上げ準備完了。クルーも全員配置につきました。」

クボは、チェックリストを確認しながら、シゲに向かって頷いた。ウサも、通信を確認し、コントロールパネルを操作している。その時、マサトが緊迫した声を発した。

「シゲ！ 本当に打ち上げ態勢に入ってるよ！」

「何だつて？」

「この訓練は、エンジン点火はしないよね？ でも、エンジンに点火されてる！コントロールセンターで何か操作したの？」

「コントロールセンター！ こちらの機関士がエンジン点火を確認。至急確認を頼む！」

『こちらコントロールセンター。ただ今確認中。      こちらでは確認できない。発射状態に入っているのか？』

「そうだ。こちらのパネルでは、エンジン点火の表示が出ている。実際、微振動を身体で感じる。どうなってるんだ？」

背中を向けて作業していたマサトが、シゲを振り返った。その顔は、今までに見たこともないような大人の顔をしていた。

「シゲ。あと五分で発射しないと、負担が大きすぎてエンジンが爆発する。もう、エンジンを切ることが不可能だ」

「そんなことがあるのか……。五分つて数字は……。信頼できる数字です」

シゲは、隣に座るクボの顔を見た。クボはシゲの口から発せられる言葉を予想して怯えているようだった。

「このまま打ち上げをしたら、言うまでもなくお前が操縦することになる。予想外のことも起きると思うが、大丈夫だな？」

「」

「クボ！」

「わかりました」

シゲは勇気付けるようにクボの手を触ると、マサトを振り返った。

「マサト、発射までのリミットは？」

「あと、四分三十秒」

「ウサ、こちらの状態をコントロールセンターに送れ」

「はい」

「こちらシャトル。今、こちらのデータをコントロールセンターに送っている。発射までのリミットは四分三十秒。機関士の判断によ



り発射することにする。そちらも、そのつもりで準備してくれ」

『こちらコントロールセンター。了解した。通信はこのまま繋いでおくように。発射後こちらから指示を出す』

「カウントダウンは？」

『こちらから、二分後に出す。それまで待機するように』

「了解」

シゲが振り返ると、五人の視線が自分に注がれていた。シゲは、通信のマイクだけを切り、クルーに語りかけた。

「故障か誤作動からかはわからないが、これから発射する。不安は大きいと思うが、冷静に行動してくれ。約二分後にはカウントダウンが始まる。それまでに現在の状況、装備品の確認など大至急するように」

機関士のマサトと通信士のウサ、衛生士のヒロミ、操縦士のクボがパネルを操作して次々に確認する。

「燃料は四タンク中二タンクが満タン。酸素も五タンク中三タンクは満タンです」

「通信に異常はありません」

「衛生用品は揃ってます。食料は約一週間分」

「飛行プログラムはガニメデ、に行くプログラムで設定されています」

「今日の午後に全部の装備を整える予定だったから、完璧には揃ってないか」

シゲはため息をついてマイクのスイッチを入れた。

「こちらシャトル。現状を把握した。発射と同時に地球帰還用の飛行プログラムの変更データを送ってください」

『こちらコントロールセンター。了解した。今、変更プログラムを作成中だ。完了次第送信する。まもなくカウントダウンに入る。クルーは発射準備に入るように』

「了解」

シゲは、右隣のクボをもう一度見た。青ざめた顔はしているもの

の、瞳はすっかりしているように見えた。

「まもなくカウントダウンに入る。全員のイヤフォンからカウントダウンが聞こえるだろう。ベルトをしっかりと締めて、心の準備をしておくように」

そして、左隣の副機長タカを見た。

「タカ、フォローを頼む」

「お互い冷静にがんばろう」

全員のイヤフォンにコントロールセンターからの音が入ってきた。

『こちらコントロールセンター。これからカウントダウンを開始する。これは訓練ではない。繰り返す。これは訓練ではない』

全員の頭の中に「訓練ではない」という言葉が繰り返される。  
『こちら、コントロールセンター。カウントダウンを開始する』

．．．ten．．．nine．．．eight．．．seven．．．  
．six．．．

．．．five．．．four．．．three．．．two．．．  
one．．．Ignition．．．Lift Off!

振動が大きくなり、窓の外には煙が見え始めた。

六人を乗せたシャトルはゆっくりと地上を離れた。

地球を飛び立ってから三十秒後には地球の大気圏を離脱し、見る見る地球が遠くなっていた。開発によりシャトルの速度は速くなったが、プログラムミスやこんな非常事態の時には、それが裏目に出る。プログラムの変更をしている間にも、シャトルは遠慮なく進んでいくのである。

機長であるシゲは、シャトルの飛行が安定したのを確認すると、椅子から立ち上がり、ウサの元へ行った。

「ウサ、まだコントロールセンターから、変更プログラムは届かないのか？」

「うん。まだ届かない。あと、約五分でデータが届かないと、その後、一分間通信不可能の地帯に入るよ」

「それは、向こうでもわかってるはずだから、それまでには届くだろう」

「万が一、それまでに届かなかつたら　その後、コントロールセンターの通信はできなくなっちゃう」

「どういうことだ？」

それまで黙って会話を聞いていた、副機長のタカが口をはさんで近づいてきた。

「まだ訓練中だったから、近距離通信の機材しか積んでないの」

「発射前にはわからなかったのか」

「わかんなかった。発射後、通信速度が遅くなったから、ひよつとしたらと思って確認したら　近距離用だった」

シゲとタカは顔を見合わせた。ウサも緊張した面持ちで二人を見上げている。シゲは、座席に戻るとイヤフォンを装着した。

「ウサ、まだ通信は可能なんだな？」

「大丈夫。あと十四分二十秒可能だよ」

「こちらシャトル。応答願います」

『こちらコントロールセンター。どうぞ』

「シャトルに積んでいる通信が、近距離用のものと判明。十四分十秒後には通信が途切れる。それまでにプログラムを大至急送ってくれ」

『了解。もう少し待ってくれ。それまでには送る』

「この任務の指揮者のマツはいますか？」

『マツだ』

「僕たち 帰れますよね？」

『最善を尽くしている。お前たちは優秀なメンバーだ。自信をもって行動しろ』

「わかりました」

通信を一旦切ると、視線を右に動かした。

「クボ。もう、自動操縦に入ったか？」

「ああ、ガニメデへの自動操縦に入ってる」

「万が一のために、こっちでも変更用の軌道を探しておいてくれ。完成したら、マサトとガニメデのプログラムを停止して、クボが作ったプログラムで帰還できるようにしといてくれ」

「わかった。じゃ、ここを離れて実験室にいるから。ここをよろしく」

クボは立ち上がると、ぼんやりと窓の外の星を見ながらコントロールルームを出て行った。

「なんで、こんなことになったんだろう？」

今まで誰も口にしなかった疑問をウサが口にした。今までになかった事故。機械のミスとは考えられなかった。

「今は、帰ることだけを考えよう。初飛行とはいえ、この六人は優秀な人材が揃ってる。絶対不可能ではないからな」

マツの言葉が蘇る。きつと、大丈夫。このメンバーなら不可能はないはずだ。

シゲの言葉に少しは元気づけられたのか、ウサは立ち上がってコ

ントロールルームを出て行こうとした。

「ちよつとクボの様子見てくるねー」

扉が自動で開き、ウサを飲み込んで再び閉まった。

「プログラムは間に合うかな？」

タカが、ウサの座っていたところのモニタを見つめる。地上のコントロールセンターからの受信は何もないようだった。

「待たずに、早く軌道修正したほうが良くないか？」

「クボの修正がセンターより早く届いたら、そうするよ」

ウサはすぐに戻ってきて、「クボがんばってた」とだけいい、自分の席に着いてセンターからの受信を待っていた。シゲは、イヤフォンをはずさずに、センターからのアクセスを待っていた。

それから、十分ほど経過して、クボが戻ってきた。片手にプログラムのディスクとプリントアウトした用紙。それに、口にタバコを咥えて、疲れ切ったような表情をしていた。

「クボ、出来たのか？」

「ああ。センターからプログラムは？」

「まだなんだ。あと約三分で通信が途切れるから、センターからのプログラムを待たずにクボのプログラムを使おうか」

シゲがそう提案すると、クボは複雑な表情で頷いた。

「こちらシャトル。コントロールセンター応答願います」

『こちらコントロールセンター。プログラムを送ろうとしているのだが、そちらに接続できない。通信士はいるか？』

「はい。ウサです。こちらからは異常が確認できません。送信は可能です。再度送信願います」

ウサは、モニタを睨みながらキーボードをすごい速さで叩いていた。

「クボ。そのプログラムを使うことになりそうだな。マサトと準備を始めてくれ」

シゲがそう言うと、マサトが走り寄ってきて、クボの持つディス

クを受け取った。

「シゲ。間もなく通信が不可能な地域に入るよ。おそらく、このまま地球との交信は不可能になる」

「じゃ、俺たちの力だけで地球に帰ろう」

皆がシゲの周りに集まって、不安げにシゲを見つめていた。

「コントロールセンター。間もなく通信不可能な地帯に入る。このまま交信は復旧できないと思われる。こちらで用意したプログラムで地球へ帰還してみる」

『こちらコントロールセンター。了解した。こちらからも別のアプローチで援護する』

その言葉を最後に、地球との交信は終了した。シゲはイヤフォンをはずして、自分の席に座った。

一方、クボは新しいプログラムを登録し、マサトはガニメデへのプログラムを停止する作業をしていた。誰も何も話さないまま、キーボードの音だけがコントロールルームに鳴り響いていた。

「よし。停止した」

マサトは、腕を前方に伸ばして「うーん」と唸ると、立ち上がりクボのそばに行った。

「クボ。手伝おうか？」

「いや」

クボは頭を抑えてじっとしていた。マサトがクボの顔を覗き込むと、青白い顔をしていた。眉間に皺を寄せて、ひどく汗を掻いている。

「クボ！ 大丈夫？」

ヒロミもクボが尋常でないことに心配して駆け寄った。その瞬間、マサトが息を吞んで、クボのキーボードの上にあった紙を床に落とした。

「クボ これ入力したの？」

「マサト あと たのむ」

クボは、椅子から滑り落ちるように床に崩れ落ちた。

「クボ！　しっかりしろ！　マサト、どうした？　そのプログラムがどうかしたのか？」

一瞬で青ざめたマサトにタカが近づいた。マサトは床に落ちた紙を見つめたまま何も言わなかった。そこへウサが近づいてきて紙を拾う。

四、五秒沈黙が続いた。

そして紙に目を通していたウサが大声を上げた。

「わあああつ！　これ　イオに行くプログラムじゃん？」

「何っ？　本当か？」

「ウサ、プログラムくらい読めるもん。　これ、今クボが作ったの？　これ、修正も困難なプログラムになってるよ」

「マサト、修正できるのか？　本当にこのプログラムを入力してしまったのか」

マサトは正気に返り、クボのいなくなった椅子に腰掛け、キーボードを叩きながらモニタを流れる文字を見ていた。

「イオのプログラムです。修正には時間が掛かります」

シゲとタカが顔を見合わせて絶句した。その横で、ヒロミがクボを仰向けにして、脈を診ていた。

「これからクボの様子を見るわ。タカ、医務室まで運んでくれる？」

タカがクボを抱え上げ、医務室に向かった。ヒロミはマサトとウサが見つめるモニタが気になったが、タカと共にコントロールルームを出た。

「ねえタカ。イオって、ガニメデと同じく木星の衛星よね？　あそこは全く開発されてないでしょ？」

「ああ。あそこに着陸しても何の基地もない。まだ火山活動が活発だから、開発ができない状態なんだ。今、木星の衛星で開発が完了

したのはガニメデだけなんだ。エウロパも氷の上に基地を作ること  
に成功して、開発に着手したんだが、四十年位前にウイルスが発生  
して、そのまま開発は延期になってるらしい。ウイルスそのものは  
駆除したらしいけどな。しかし、イオに着陸しても、地球には帰れ  
ないぞ。それは、クボも知ってるはずなんだが」

「クボ どうしたのかしら。そんな間違いをする人じゃないのに」  
医務室に着くと、タカはベッドにクボを寝かせ、手足を固定した。  
「みんなに、クボの様子がおかしくなかったか聞いてくるから。何  
かあったら、内線で連絡する。イヤフォンを装着しておいて」  
「わかった」

タカは、軽く手を上げて医務室から出た。ため息をついて天井を  
見上げる。無機質に天井を這うケーブルを眺めた。信号を発したと  
ころから、行動を起こす所までを繋ぐケーブル。赤、黄色、黒、緑、  
青のケーブルが、血管のようにシヤトル内を這っていた。

小さく口を開けたタカは、呼吸を止めて意識を自分の中に戻した。  
タカの思考をする時の癖である。目を細めて一つ溜息をつく、医  
務室に戻った。

「ヒロミ、一通りの検査が終わって、もし異常がなかったら、クボ  
の身体を金属探知機で調べてみてくれ」

「え？ 金属？」

「頼んだぞ」

それだけ言うと、医務室から飛び出して、コントロールルームに  
戻った。

マサトがクボの席で、キーボードを叩いていた。横でウサが一言  
二言しゃべると、マサトは頷きキーボードを叩く音が早くなる。シ  
ゲは、後ろから二人を見つめていた。

後方で扉の開く音がして、タカがコントロールルームに戻ってき



た。

「クボは？」

ウサがマサトから離れてタカの目の前でジャンプした。四十センチの身長之差を気にして、タカの視界に入ろうとしているようだ。た。

「ウサ、鬱陶しい」

タカはウサの頭を押さえつけた。

「クボはまだ意識を失ってるよ。最近、クボの様子はおかしくなかったか？」

「ウサ知っているー。クボね、首が痒かった」

「ああ。昨日、ロビーで寝てしまって、その後しきりに首を掻いてたな」

シゲが頷いて腕を組んで、俯いた。

「虫刺されてことはないだろうし、酸欠ってこともないよな。感染病の可能性も。だいたい病気になったからって、地球へ帰るプログラムとイオのプログラムを間違えるはずがないし」

「そうなんだよな。まず有り得ないミスだよな。何か別の要因が」

「

その時、全員のイヤフォンからヒロミの声が聞こえた。

『みんな聞こえる？わかったよ。クボが混乱した訳』

「どうした？」

『遠隔操作されてたの。首にチップが埋め込まれてた。これは多分受信機。機内のどこかに発信機があるはずよ。脳を操作されていたのかしら？』

ヒロミの声が途切れると、タカとウサは示し合わせたようにコントロールルームを飛び出した。各寝室、実験室、動力室、格納庫、食糧庫。各ブースを隈なく探した。そして、十数分後、二人はコントロールルームに戻ってきた。ヒロミはすでにコントロールルームに戻っていた。

「見つかったよ。ご飯といっしょにあった」

「食糧庫の隅に貼られてた。意図的だな」

タカは三センチ四方の銀色の立方体をウサに渡し、ヒロミもシャープンの芯を三分の一の長さにしたような受信機をウサに渡した。

「これ、うちの施設で作った物かも。似たような機械を見たことがあるよ。地球に帰ったら、ヒルさんに聞いてみる」

腰にぶら下げてる小物入れに無造作に二つの機械を無造作に入れた。

「あ。発信機の電池はずさなきゃ」

ウサは小物入れを腰から外して床に座り込み、袋の中の物を全部ひっくり返した。今入れたばかりの発信機と受信機を床に散らばったガラクタの中から探し始めた。それを見た他のクルーたちに一瞬だけ優しい微笑が戻った。

「さあ。これからどうするか、話し合おう」

シゲが席に戻るとウサを除く他の者も席に戻った。椅子を百八十度回転させ、キーボードやモニタに背中を向ける。全員の顔が見渡せる形になった。中央の床にはウサが座り込んでいた。

「まず、ヒロミはクボの状態を報告して」

「クボの首筋に、チップが埋め込まれてたの。傷ひとつ残ってなかったわ。短時間で入れたのなら、すごい技ね。食糧庫にあった発信機からある信号が出て、クボの受信機に受信をすると　どうなるのかしら？　ウサわかる？」

「うん。あれね、たぶん　脊髄と脳に作用する信号が出るの。前頭葉と海馬の能力を低下させるの。そうすると、判断が鈍くなるから、行動が変になるよ。」

例えば、事前に「ラーメンを食べなさい」っていう指令を無意識のレベルで受けてたとするでしょ。で、焼肉を食べようと思ってる時にその信号を受けると、焼肉じゃなくてラーメンを食べちゃうの」

「後遺症は？」

「うーん。後遺症はあんまりないと思う。昨日埋め込まれたでしょ

「時間短いもん」

「そうか　じゃあ、マサト、クボが目覚めるまで、プログラムの変更はお前に任せる」

「わかった。　でも、この船の酸素と燃料が残り少ないんだ」

「あとどれくらい？」

「地球に帰るには足りない」

シゲが険しい顔をした。

「ガニメデに行くなら足りるのか？」

「　　一つ提案があるんだ」

マサトは、神妙な顔でそう言った。全員が固唾を呑んでマサトを見つめている時に、コントロールルームの扉が開いた。

「クボ！」

「大丈夫なの？」

「　　申し訳ない　　本当に　　取り返しのつかないことを」

クボは、部屋に入るなり座り込んで、顔を伏せた。シゲが立ち上がり、クボに近づいた。

「聞いたよ。操作されてたんだろ？　仕方ないとは言えないが、今は地球に帰ることに全力を尽くそう。クボの協力も必要なんだ」

シゲがクボの肩を触ると小さく震えて、一層床に近づいた。

「しっかりしてくれ。急いでプログラムを変更して地球に戻らないと、酸素も燃料も足りなくなるんだ」

ヒロミも傍に座り込んで、クボの肩を抱いた。ヒロミにクボをまかせ、シゲは席に戻った。

「マサト。そのもう一つの提案を聞かせてくれ」

「このまま　エウロパへ向かう」

俯いていたクボは顔を上げて、マサトを見つめた。全員が言葉を発さずにマサトの続きの言葉を待っているようだった。

いつもよりも、少し大人びた表情をしたマサトが、小さく息を吸って口を開いた。

「エウロパへ向かうのが、一番いいと思う」

マサトの言葉に、誰もがどう答えていいのかからなかった。暫くの沈黙の後、口を開いたのは機長のシゲだった。

「ガニメデは？　ここからガニメデには向かえないのか？」

「ガニメデまでは燃料が持たない」

「しかし、燃料が持つ可能性があるなら、ガニメデに向かった方が。だいたい、エウロパに行っても何もないだろう？　開発がストップして、基地はもう動いていないし、ウイルスが発生したから誰もあそこには残っていないはずだ」

「ああ。でも、ウイルスの駆除は完了したし、酸素や燃料はそのまま大量に残されてるはずだ」

「知ってるように、言うな」

タカが、怪訝そうにマサトを見た。

「知ってるんだ。五年前まであそこにいたから」

「！」

「聞いたことあるでしょ？　東棟で秘密裏に行っていると言われていた実験、「人間の冷凍保存」。あれは噂じゃなくて、エウロパで本に行われていたんだ。それで、最初の被験者は、俺　なんすよ」

聞く者全員の表情が凍ったまま、マサトの顔を見つめていた。

マサトが冷凍保存の被験者？

「今は俺の話をしてる時間はないっす。早く、エウロパに軌道を修正しないと」

シゲは立ち上がった、全員を見渡した。

「マサトの指示に従おう。悩んでいる間にも、燃料も酸素も消費しながらイオに向かっているんだ」

「いいのか？　そんなに簡単に信じて？」

タカは眉間に皺を寄せて、首を横に振った。

「今は信じるしかないだろう。これからエウロパに向かうことにする」

ウサは首を傾げて「うん。マサト嘘つかないもんね」とエウロパ行きに賛同した。

「私は、シゲの指示に従うよ」

ヒロミがそう言うと、隣でクボが頷いた。そして、全員がタカを見た。

「ああ。俺も、シゲの命令に従うよ」

シゲは安堵した表情でタカを見た。マサトもほっとしてような表情を浮かべている。

「では早速だが、クボとマサト。エウロパに軌道修正してくれ」

「わかった」

「了解つす」

クボが立ち上がり、マサトの傍に近づいた。

「マサト。迷惑をかけた」

マサトは、「いいえ」と言ってキーボードに向かった。

「ウサ。エウロパまでの時間を弾き出して、酸素、燃料が足りるかを調べておいてくれ」

「はあい。タカにも手伝ってもらっていい？」

タカはシゲを軽く見た後、シゲが頷くのを確認すると「手伝うよ」と言っ、ウサと実験室に消えていった。

地球から離陸して一時間十五分経とうとしていた。クボ、マサトは、エウロパへの軌道修正を完了し、燃料、酸素も、エウロパ到着まで間に合うと判断された。

「燃料は通常通りに使って、なるべく急いで到着する。酸素は、通常の八十パーセントの使用量で使う。少し息苦しいかもしれないが、

我慢してくれ」

全員揃ったところで、シゲがそう伝えた。

「あと一時間ほどでエウロパに到着するはずだ。それまでの間に一

つ」

シゲはそう言って、マサトの方を見た。

「冷凍保存の 話っすね？」

シゲが頷くを見ると、マサトは少し俯いて口を開いた。

「俺が生まれたのは二〇五九年なんだ」

「え？今、二二二五年だから そのまま生きてたら六十六歳？」

ウサが瞬時に計算して、瞬きもせずに驚いた。

「そう。ちょうど、ウサたちの親の世代 になるかな？俺は十八歳でアンダーグラウンドエイジアに入って、それから三年後にエウロパの探査チームに入ったんだ。その頃はガニメデよりも先にエウロパを開発する予定だったんだ」

マサトは、一旦深く息を吸うと、目を閉じた。

「その時のメンバーは、俺と、ユウジと、シュウだった。シゲユウジって知ってるよね？」

「え？ お、おやじ？」

「そう。シゲのお父さんと組んでたんだ」

少し癖のある髪を掻きあげ、シゲを見つめた。

「俺たちは向こうに行ってから、思いもよらない事故に遭ったんだ」

宇宙開発を始めたばかりのアンダーグラウンドエイジアは、木星の衛星である氷の星エウロパの開発に着手し始めたところだった。

地球と同じようにエウロパにも大気圏を作り、氷上で暮らせるようにならないかと研究を重ねていた。アンダーグラウンドエイジアに来て、三年が過ぎたマサトにエウロパ行きの指令が出た。地球でシヤトルの開発に携っていたマサトにとって、それは願ってもないチャンスだったのである。

「俺、シヤトルの技術士なのに。向こうで役立てることがあるんですか？」

「君の技術力と思考能力は、この施設でずば抜けたものだからね。あちらでも活躍してもらいたい」

普段入ることのない東棟の一室に呼ばれ、そう言われた。

「現在共にチームを組んでもらっている、ユウジ、シュウと一緒に飛び立ってくれ」

出発は二カ月後。それまでに、シヤトルに乗るための訓練を繰り返すこととなった。

「俺たちはマサトのおまけなのか？」

東棟に呼ばれずにエウロパ行きが決まったユウジは、鼻息を荒くしてマサトに近づいた。

「そりゃ、マサトの方が技術力あるしな。アングラの知的財産って噂されてるくらいだし。仕方ねえけど」

> アングラとは、アンダーグラウンドエイジアの省略した呼び名である。マサトの存在はものの三年で、アンダーグラウンドエイジアの知的財産と言われるまでになった。

「俺、そんな自覚ないんすけど」

「いいの。いいの。お前はそれでいいの。頭良く見えて、本当に頭

が良い奴なんて、憎らしいだけだから」

マサトは、深く意味も考えずに「そうっすか！」と素直に喜んだ。隣で見ていたシュウがくすくす笑いながら言った。

「マサトはいいよな。このプロジェクトが成功すれば、幹部候補か？俺たちはあくまで付属だもんない。お前が東棟に移ったら、俺たちも呼び寄せてくれよな。できることなら、技術職じゃなくて研究職に就きたいよ」

「そうか？俺は技術職でもいいなあ。十分楽しいじゃん。俺たちが作ったり整備したシャトルが、宇宙へ飛んでるんだぜ。すげえよ」

ユウジはニコニコしながら答えた。マサトが首を傾げてシュウとユウジを交互に見た。

「そんな。俺は東棟に行く気はないよ。とにかく、エウロパでしっかり任務をこなそうぜ」

マサトがそう言つと、シュウはマサトとユウジの肩を抱いて「じゃ、訓練に行きますか」と促した。

それから約二カ月後。

マサトは、ユウジと地上に出ていた。太陽は焼けるように暑く、地上で草木が成長しなくなっていた。数十年前には地上で人間が暮らせなくなるだろうと予測されていた。

そんな、灼熱の地球でマサトはコンクリートの上に寝転がっていた。ユウジはマサトの足元に座っている。

「あつついなー」

ユウジは、太陽光を避けるためにシーツを頭から被り、汗を流していた。

「太陽の暑さを感じておきたいんだ」

「もう、部屋に戻ろうぜー。熱中症になっちまう」

ユウジは振り返って転がっているマサトを見た。瞬きもせず、空に流れる雲を見ている。マサトはユウジの視線が自分にあるのを感じて、にっこりとユウジに向かって微笑んだ。そして、ゆっくり



と空に視線を戻した。

夢げだな

どこかへ消えてしまいそうなマサトに、ユウジは声を掛けずにいられなかった。

「絶対、地球に帰って来よう」

マサトがぼんやりと頷いた。ユウジは隣に寝転んでマサトの手首を掴んだ。コンクリートの熱さが、あつというまに背中に浸透する。熱さを一時我慢して、マサトが見ている空を、一緒に見上げていた。いつまでもこうしていたい。二人は強くそう思った。しかし、そんなささやかな願いも叶うことはなかった。

地球を出発して、二日後にはエウロパへ到着した。小さなトラブルも無く地上を離れ、二日後にはエウロパに到着した。まだ大気圏の完成していないエウロパでは、コロニーと呼ばれる大きなドームをいくつも作っていた。コロニー内では宇宙服も酸素ボンベも必要なく、気候も安定していた。その中でも一番大きなコロニーでマサト達は研究を続けていた。

そして、エウロパに上陸して半月が過ぎた頃。突然、研究者たちが原因不明の病気で倒れ、死亡した。研究よりも先に、原因不明の病気の解明が急がれた。その結果、蔓延し始めたウイルスは空気感染するものと判明。感染者は別のコロニーに移され、治す術もなく発症から約一週間で命を失っていった。上陸から一ヶ月が過ぎた頃には、エウロパに滞在するものの二十五パーセントが感染し、命を落としていった。その後、地球から細菌学者を連れてきて原因追及に力を注いだ。

エウロパ上陸から二ヶ月半過ぎた頃、エウロパの氷の下から発生

するガスが人体に悪影響があると分かった。現状では打開策は無く、感染していない研究者、技術者すべてが地球に帰還することになった。感染してから一週間ほどで死に至るウイルスは帰還の準備をする者たちにも、容赦なく襲っていった。

そして、マサトがウイルスに感染した。

アンダーグラウンドエイジアの幹部達に衝撃が走った。知的財産と言われるマサトが残り一週間の命となったのである。マサトを失うわけにはいかぬと、エウロパと地球で話し合いが何度もなされた。その間にもマサトの病状は悪くなる一方だった。

「マサト。きつと、みんながお前のことを守ってくれるから

」

ガラス張りの個室に眠るマサトを、ユウジとシュウはガラス越しに見つめていた。たまに目を開けては、ユウジたちに視線を送り弱しく微笑んだ。華奢な身体が尚一層痛々しく映る。

そして、マサトが倒れてから三日後。決断が下された。

「え？冷凍保存？」

マサトと共にチームを組んでいたユウジとシュウにその報告が届いた。

「ここで冷凍するんですか？」

「あんな辛い状態のまま眠らせるんですか？」

二人の質問に沈黙で答えた中年の男は、「明日保存器に移す」ただ言って、ユウジたちから離れようとした。

「待ってください！冷凍保存の実験は完成していないと聞いています。まだ、テスト段階だと」

「マサトが第一被験者となる」

ユウジたちは、報告を受けたその足でマサトの部屋に向かった。

ユウジは室内のスピーカーに通じているマイクを借りて、マサトに話しかけた。

「マサト。お前、明日　冷凍保存されることになった」

マサトは目を見開いて起き上がった。ベッドから降りて、ガラスの向こうに立つユウジに近づいた。マサトがガラスに手を当てると、ユウジもガラス越しに手と手を合わせた。

「俺たちもそんなことはしたくない。一緒に地球に帰りたいんだ」

マサトは、ユウジを見つめて首を振った。ガラス越しに「イヤだ」と何度も声が聞こえた。

「でも、このままじゃお前、他の奴らと同じように死ぬだけだから

」

「構わない。冷凍になんかされたくない！このまま死なせてくれ！」

「マサト　わかってくれ」

「イヤだ！」

「生きられる可能性があるのに、マサトが目の前で死んでしまうのは嫌なんだ！」

「俺は、いつ目覚めるか解らない眠りになんてつきたくない！」

マサトはガラスを拳で叩いて、座り込んだ。体力をかなり消耗しているにもかかわらず、力強く首を振った。

「俺を一人にしないでくれ！どうして生き延びることは選択できるのに、死ぬことを選択させてはくれないんだ！」

ユウジはため息をついて、頭をガラスに凭せ掛けた。マサトの言葉が深く心に入る。

「どうして死ぬことは選択できないのか」

マサトを生き延びさせるだけが、優しさではないのだろう。だが、生きてゆける可能性があるにも関わらず、死を選択することは自分にはできなかった。

「マサト。きつと迎えに来るから。俺たちが生きてる間にきつと解凍するから。だから」

「このまま死なせてくれないのなら　いっそ　今、殺してくれ

その場に泣き崩れるマサトを抱きしめてやることもできず、ユウジとシユウはガラス越しにマサトを見つめていた。言葉を掛けられないユウジの肩にシユウはそつと手を置いた。

「ユウジ。マサトに選択の余地はないんだ。このままお前が何を言っても、マサトを苦しめるだけだぞ」

そう言つて、シユウは部屋から出て行つた。しかし、ユウジは動かなかつた。確かに、マサトに選択の余地はない。だからこそ一人で眠りに就くマサトのそばに居てやりたかつた。これから寂しい思いをするであろうマサトの、自然の流れの中で生きたマサトの最後の姿を、目に焼き付けておきたかつた。そして、マサトの記憶に、自分を残しておきたかつた。マサトは一人ではない。そう、伝えたかつた。

「約束する。必ず迎えに来るから」

泣きじゃくるマサトを抱きしめてやることもできず、二人はガラスを隔てて、そのまま朝を迎えた。

マサトが麻酔で眠らされ、冷凍保存器の中に移された。部屋の中には三台の保存器があり、真ん中の保存器に入れられた。

「冷凍を維持するためのエネルギーは足りるんですか？」

ユウジは、透明の円柱の中で眠るマサトを見つめたまま、技術士に声を掛けた。

「三台同時に使つても、百年は維持できるよ」

「解凍の予定は何年ですか？ 五年？ 十年？ それくらいにはウィルスの治療方法が見つかりますよね」

「いや、地球からの指令では約四十年と聞いている」

「よ 四十年？」

思わずユウジは、技術士の肩を掴んでしまった。

「そんなに眠らせたら、マサトは誰も知らない世界に目覚めること

になるじゃないですか！」

「しかし、エウロパが危険な以上、この開発はストップする。これからは、ガニメデの開発に力が入るだろうから、エウロパに手が回るのは四十年後くらいと予測したのだろう」

「約束したんだ　俺たちが迎えに来るって　約束したんだ！」

「何とも言えない。このウイルスが落ち着くまでは、このエウロパに着陸することはないだろう。四十年というのはあくまで予測であって、ウイルスが落ち着かなかった場合には、もっと長くなることも」

ユウジは保存器に近づき、透明の容器に爪を立てた。

「　せめて、スイッチは俺に押させてください」

技術士は頷くと、他のスタッフに準備を急ぐよう急かした。

「四十年後、また会おう」

スイッチにゆっくり指が伸びた。

スイッチを触れても、なかなか力が込められなく、指先が小さく震える。後ろから「ユウジ　」とシュウに呼びかけ、目を閉じて指に神経を集中した。

カチツという軽い音の後に、低いモーター音が部屋中に響き渡った。

マサトの姿は見えなくなり、そこには白い円柱があるだけになった。

ユウジとシュウが保存器のある部屋から出ると、扉の外でユウジたちにマサトの冷凍保存の報告に来た中年の男性が一人立っていた。通り過ぎようと呼び止められた。

「マサトが冷凍保存されていることは、地球に帰っても誰にも言わないように」

「」

「この技術は、まだ公表できる段階ではない。他言しないように」  
静かな威圧感を残して、中年の男性は廊下の奥に消えて言った。

四十年後の二二二〇年。

エウロパからシャトルが帰ってきた。

アンダーグラウンドエイジアの東棟にいる幹部だけで構成されたチームが戻ってきたのだ。任務は、マサトの地球帰還だった。マサトの冷凍保存から四十年が経過しても、エウロパは開発再開はされなかった。しかし無人探査機で、エウロパの有毒ガスの発生が沈静化したことが確認できたので、マサトの地球帰還が実現したのだ。

マサトの身体は、東棟地下の解凍専用室に安置され、解凍が完了するとりハビリが始まった。

時間の流れが分かりにくい東棟地下で生活しているマサトは、今が何年なのか、何処にいるのか理解していなかった。

「すいません。俺、冷凍保存されてたんすよね？」

「今は何もお話できません」

マサトが何を聞いても回りのスタッフはそう答えるだけだった。

マサトはどれ位経ったのか分からないまま、どこにいるのか分からないまま、目覚めてから三ヶ月を過ごした。冷凍保存されたような感覚はなかった。冷凍保存されたのは嘘であつたのではないかと思ひ始めた頃、白衣の老人の男性が目の前に現れた。

「今日は、マサトの今の状態と、今の環境について話をする」

いつも過ごしているフロアから一階層上のフロアの一室で、マサトは現状を認識することになった。

「まず、マサト、おぬしが冷凍されたのは、二〇八〇年のことじゃった。エウロパでウイルスが蔓延し、感染したので冷凍保存されたのだつたな。それは覚えているかな？」

「はい」

「そして今は、それから四十年経過している」

「え？」

「今年は二二二〇年。ちょうど四十年後なんじゃ」

「場所はアンダーグラウンドエイジア。地球に戻って来ておる」

「大丈夫かね？」

「嘘ではないですよ。俺、冷凍保存された感覚はないんです。普通に眠って目覚めた。そんな感じだったんですけど」

「ほう それは興味深い。研究資料に残しておくことにするかの。もちろん冷凍保存された君は、四十年の時を経て目覚めたのだ」

「理解できないかね？」

「いえ、驚いているだけです。理解はできます」

「それを聞いて安心したよ。他に何か質問は？」

「ユウジとシュウは？」

マサトは、少し不安げな表情で聞いた。目の前の白衣の老人が、手元の資料を広げた。

「一緒のチームだった人だね。ふむ。シュウは、契約を終了してアングラから出て行ったよ。それからユウジは 地球に帰ってきてから、ガニメデの開発チームに入ったのだが、向こうの事故で無くなった。今から十三年前の事じゃ」

「そう ですか」

「ユウジの子供が、今このアングラにいるよ。シゲというんじやが」

「

マサトは、目を閉じて一呼吸した。

「年はいくつですか？」

「今年で二十九歳だったかのう」

マサトは暫く目を閉じていた。ユウジの子供が自分よりも年上になっている。奇妙な感覚だった。自分が眠る前に共に過ごしたユウジやシュウはここにはもういない。それならせめて、ユウジの子供



と共にいたかった。ユウジの存在を傍に感じながら、新しい世界で生きていきたかった。

マサトは目を開いて、老人を正面に見据えた。

「そのシゲと同じチームに入れてください。俺は新人技術者ってことで置いてもらえませんか？」

「それは構わんが。四十年前同様、ここの研究、開発には携ってもらふよ。それから、自分が冷凍保存されたと言うことは、誰にも言わんように。冷凍保存は未だ研究途中のプロジェクトなんじゃ」

「わかりました」

白衣の老人は、広げた資料をまとめ、部屋から出て行った。

遠ざかる足音を聞きながら、部屋に残されたマサトは机に突っ伏した。

「ユウジ！」

もうユウジと会う事ができないのが、信じられなかった。長い時間が過ぎて行ったのだと痛感する。

出発の前日、熱いコンクリートの上で共に空を見たのが昨日の事のように思い出された。「絶対地球に帰って来よう」と誓った仲間。こんな形で地球に帰ってくるなんて思いもしなかった。

そして、生き長らえた事が、嬉しいとは正直に思えなかった。

「迎えに来るって約束したじゃないか ユウジ！」

もう二度と泣かないと思いつながら、四十年前の思いに身を委ねていた。

マサトは話し終えると、シゲの近くに歩み寄った。足元に座ってシゲの顔を両手で包んだ。

「本当に ユウジにそっくりだ」

「小さいとき、親父に聞いたことがあるよ。大事な友達と別れたことがあるって。約束を守りたいんだって。守らなくちゃいけないんだって、いつも言ってた」

シゲの顔から手を離すと、シゲの膝の上に顔を伏せた。

「まさか、それがマサトだったなんてな。信じられないよ」

「 ユウ ジ 」

マサトの声は震えていた。四十年の時を越えて目覚めた者の苦悩。どんな言葉をかけても、マサトの心は癒せないのではないかとシゲは思った。あまりに重い告白に、誰からも言葉が出てこなかった。シゲはマサトの頭を軽く叩いて、言葉を絞り出した。

「話してくれてありがとう」

ゆっくりマサトは顔を上げ、窓の外を見た。外には、昔に見た記憶のままの大きな赤茶色の惑星が見えた。

ユウジと一緒に見た時と、何も変わらない太陽系最大の惑星。

「木星が見える。もうすぐエウロパに着くよ」

そう口に出して、気がついた。ユウジも赤茶色の惑星を見つめながら、同じ事を呟いたのだった。思わず口元が綻ぶ。

そして、全員が窓の外を見た。美しい太陽系最大の惑星が見える。マサトは腕時計を見て、暫く目を閉じた。何かのスイッチが入ったように勢いよく目を開き、立ち上がった。

「さあ、着陸準備をしなきゃ。あ、それとお願いなんすけど。これから、その俺との関係は何も変えないで欲しいっす」

シゲは頷き、ウサは「もちろんっ！」と元気に答えた。他の者も皆頷いてマサトを見つめる。

「じゃ、準備を始めよう。クボは着陸準備。マサトは着陸場所をクボに指示してくれ。ウサは着陸後、エウロパからガニメデや地球と交信が出来ないか確認すること。マサトは手が空いたら、エウロパの簡単な地図と、酸素、燃料の保管場所を僕とタカに教えてくれ」

シゲは、テキパキと指示を出すと全員が散らばった。

クボと打ち合わせが終わったマサトが、シゲとタカのいる実験室に  
来た。

「エウロパのメインコロニーの略図を書いたつす。着陸したら、船外服を着て、コロニーに入ります。コロニーに入って正面の大きなビルの地下に酸素、燃料は保管してあります。専用のエレベータで各タンクをシャトルの傍まで運べます。このタイプのシャトルなら、タンクの設置も自動で出来るはずですので」

「え？そんな技術もここにはあるのか？」

シゲは、驚いて手に持っていたペンを机に落とした。

「ええ。重力の小さいエウロパでは可能だったので、開発されました。地下でコントロールすれば、すべて全自動で搭載可能です。クボには、着陸の方法、場所も細かく指示してますから。問題ないです。ただ」

俯いて言葉を濁らせたマサトをタカが促した。

「ただ 何だ？」

「燃料がギリギリだと思います。到着してから、ゆつくりと専用スペースに入るためには、それなりの燃料が必要なので。余計な動きをして燃料を使いすぎたら、専用スペースまで辿り着けません」

「クボの操作能力なら大丈夫だろ？」

「ええ。信じてます。まず大丈夫だとは思っているのですが」

マサトはそこで言葉を区切って、略図にさまざまな注意事項を書き込んだ。シゲとタカがそれを目で追う。リズム良く書いていた手が

途中で止まった。

「さっき話した、四十年前の話なんすけど」

マサトは、ペンを置いてゆっくりと話し始めた。

「子供であるシゲにこういうことを言うのは、ちょっと躊躇われるけど、一応話しておくす。ユウジの死に、俺、疑問があるんすよ」

「疑問？」

「後から聞いた話がどうも腑に落ちなかったので、東棟のシークレツトルームにある資料で調べたんすけど、ガニメデの事故は、ユウジの他に二人も死んでたんです。それが、ユウジと一緒にチーム組んでた人とかじゃなくて、三人とも何の関係もない人だったんすよ。それって変でしょう？」

タカは首を傾げて、シゲを見た。シゲは頬杖を付いて口を開いた。

「事故だろ？そこに居合わせただけじゃないのか？」

「いや。その事故は、ガニメデでビル建設の途中に三人がビルから落下したっていう事故だったんすよ。建設に携っていた、技術員一人と研究員二人が死亡って。ガニメデの技術員のユウジと、地球でシャトルの開発をしていた研究員、それと開発室の研究員の三人だったんす。ユウジは、まあ、ガニメデの技術員だから、そういうこともあると思うんすけど。同時に事故にあった他の二人が変でしょう？」

「それで、真相は分かったのか？」

タカが結論を急ぐように聞いた。

「まだわからないす。当時、ユウジと仲が良かったシウモ、アングラを去ったし、当時の人間は、もう死んでるか、引退してるかっす。資料だけじゃ、わからないっすね」

タカは、眉間に皺を寄せて、シゲに断りを入れた。

「シゲ、気を悪くしないでほしいんだが。マサト、それは他殺かも知れないってことなのか？」

マサトは黙って頷いた。

その時、船が大きく揺れた。

「どうした？何があった？」

シゲが内線を使って、シャトル内の全員に呼びかける。誰も答える者はいなかった。シゲは実験室から飛び出し、コントロールルームに向かった。

「クボ！どうした？」

コントロールルームの窓の外には、エウロパのコロニーが見えた。着陸用と思われる大きなスペースも見える。シャトルは左右に大きく揺れながら着陸用のスペースにゆっくり近づいていた。クボは操作に集中、ウサはモニタを見ながら、何かをカウントダウンして叫んでいる。その時タカがコントロールルームに入ってきた。

「ウサ！どうした？」

タカがウサに近づくと、ウサは額の汗を拭おうともせずに、モニタに移る燃料の残量をカウントダウンしていた。

「燃料が足りないんです！飛行に必要な燃料を最小限にして着陸をしてるんですが。予定の場所まで辿り着くか」

クボが操縦桿を握りながら、必死に説明した。

「あと四キロだよ！燃料はあと三キロ分！クボ！どんなに揺れても右に寄らないで！」

ウサは燃料のモニタ、シャトル前方を映し出すモニタを交互に見て叫んだ。

「右の暗い部分はクレーターか？」

シゲは、シャトル前方を映し出すモニタを凝視した。シャトルを誘導するように白いラインの引かれた道の右には、海のように暗い空間が広がっていた。

「着陸してから、ゆっくりスペースまで動かそうと思ってただけど、スペースに直接着陸するよりほかに方法がないんだ！」

「こんなところにクレーターが出来たなんて」

コントロールルームに入ってきたマサトは、四十年前との違いに驚

いていた。

「絶对着陸してやる」

クボの戦いは三十秒後に実った。墜落同然のような着陸だったが、見事予定箇所に着陸できたのである。

「良くやったな、クボ」

全員の祝福を受け、クボは袖で汗を拭った。

「でも、ここは不安定すぎる。すぐ横にクレーターがあるんじゃない危険だから。早く燃料と酸素を装着して、少し移動しよう」

マサトの冷静な判断に、全員が頷いた。

「ねえ、マサト。今の、無理な着陸のせいで、エンジンが変になってる。あとね、着陸の衝撃で、電気回線がやられた場所があるみたい。ほら、廊下の電気ついてないでしょ？」

ウサが、キーボードをカタカタ叩きながら、マサトを振り返った。

マサトは廊下を確認すると確かに電気が点いていなかった。

「ウサと、マサトはここに残って、シャトルの修理しなきゃ」

シャトルの修理は、機関士であるマサトの仕事であり、電気技術士でもあるウサの得意分野であった。マサトは、シゲとタカに、先ほど説明した略図を渡し、操作方法が書かれてるファイルのある場所を教えて、コロニーに向かわせた。

「クボ、お願いがあるの。通信室を探して、無線が作れそうな材料を見繕ってもらえる？ウサ、あとで追いかけるから。あと、その通信室から、ガニメデと地球にSOS信号出しておいで」

「え？俺、一人で？」

「私も手伝うよ」

ヒロミが名乗り出て、クボと共に通信室に向かうことになった。

シゲ、タカ、クボ、ヒロミは船外服を着て、シャトルの外に出た。

エウロパの地上は、太陽から遠いために、日が差しているにも関わらず、寒かった。

「船外服を着てても寒いっていうのは、すごい寒さってことだよな？」

ヒロミが腕を摩りながら、急ぎ足になった。後ろを歩く、タカとシゲは、地上とは違う重力に慣れないようだった。しかし、重力よりも気になることが二人にはあった。

「さっきのマサトの話。途中になっちゃったな」

タカは、シゲの顔を見た。やはり気になっているらしく、少し落ち込んだ表情をしていた。

「他殺だとしても、どうして親父がそんな目に遭わなきゃならないんだ？」

コロニーの入り口に到着したシゲは、扉の隣にあるパネルに、先ほどマサトから教えてもらったIDとパスワードを入力した。

パスワードの最後の二桁を入力終えた時、扉が開くのと同時に地面が大きく揺れ始めた。

「な　なんだ？」

「地震か？」

十秒ほど続いた揺れが収まると、ヒロミが悲鳴を上げた。

「シャトルが　！」

それを聞いた三人が振り返ると、シャトルがゆっくりとクレーターの方に滑るように動いていた。

「なっ　クレーターに落ちるっ！」

シゲは、シャトルに向かって走り出した。シャトルは、クレーターの傍にある大きな岩のような突起にぶつかって、クレーターに落ちるのは免れた。

しかし、次の瞬間。目の前が真っ赤になった。走っていたシゲが、思わず立ち止まった。

ウサは、コントロールルームのパネルに向かって、停電の原因を調べていた。

「このこと、ここが切れてるなら。やっぱり動力室のどこかが断線したのかな。」

立ち上がり、コントロールルームを出ようと扉に近づいた時に大きな揺れがシャトルを襲った。

「何っ！地震っ？」

前方を映し出すモニタを見ると、地面が動いていた。しかし、瞬時にシャトルが動き出したと判断した。

「ここやばいっ！」

後方にある出入り口の傍に船外服が用意してあることを思い出して、廊下に飛び出した。

「っ！」

再び、大きな衝撃があり、爆風が背中を押した。

「タカッ！」

熱いと感じたのは一瞬で、廊下の壁が近づいたと思った瞬間には、全ての感覚が麻痺したようだった。

浮遊するような感覚の後、目の前に見覚えのある映像が見えた。

それは、初めてタカと会った場所。

太陽光を避けるように、日陰で座り込んでいたウサは、少しずつ太陽の光が足元に近づいてくるのを眺めていた。このまま、日向に出てしまい、太陽光を浴び続ければ、一時間もしないうちに死んでしまうだろう。それでもかまわない。望むところだ、とぼんやり足元を見ていた。

「何をしているんだ！」

遮光車から飛び降り、ウサを抱えあげて車に乗せた。



「何するの！ 下ろして！」

「何言ってるんだ！ あんな所にいたら死んでしまっただろ！」

「だって、ウサには生きていく場所がないんだもん！」

「とりあえず俺んちに来い」

汚れた手で潤んだ目を擦りながら暴れるウサという少女を、タカは自分の家に連れて帰った。

部屋に着くと、ウサをシャワールームに放り込んだ。タオルと着替えを渡し、扉を閉める。まもなく、水の音がした。

そして、タカの大きな服を纏ったウサを椅子に座らせ、コーヒーを渡した。タカは正面に座り、綺麗になったウサの顔を良く見た。自分より五歳くらい年下に見える。道端で拾ったときは、もっと幼く感じた。

「親は？」

「いない」

「家は？」

「孤児院から抜け出したの」

「どうして？」

「だって、大人になったら出て行けって言われるもん。ずっと一緒に居たい人とずっと一緒に居れないのはイヤ」

熱いコーヒーを啜りながら、淡々と答える。そして、コーヒーを飲み終わると椅子から立ち上がった。

「どうもありがとう」

「どこ行くの？」

「どっか」

「俺と一緒にいたら？」

「どうして？」

「なんとなく」

「イヤよ。仲良くなってから別れることになったら辛いから」

「ずっと一緒にいればいいじゃん？」

ウサは、少し悩んで首を縦に振った。突然、何の前触れもなく始

まった二人の生活。それから、タカとウサはいつも一緒に居た。親子でもない。恋人でもない。ただ一緒に生きてゆく相手。

爆発に巻き込まれ、薄れ行く意識の中、ウサはタカを強く想った。  
タカ、ごめん。ウサが約束守れないかも

動力室にいたマサトは大きな揺れを感じた瞬間に、作業をしていたバッテリーが大きな音を立て爆発した。

「うわあっ　！」

数メートル後方に飛ばされ、頭を振って立ち上がろうとしたとき、小さな振動に気がついた。

シャトルが動いてる？

そう思ったときには、爆風が背中を焼いた。

「　っ！」

ウサが危ないっ！

痛覚がなくなるほどの熱さに堪え、動力室の扉を開けると廊下の熱い空気がマサトを包んだ。

「　ウサ　無事でいてくれ　！」

立ち止まったシゲの目の前で、突起にぶつかったシャトルの前方が突然爆発した。シャトルの破片がシゲたちの足元に落ちてくる。

「マサト！　ウサ！」

まだ、小さな爆発を繰り返すシャトルにシゲは駆け出した。

「シゲ！」

タカは追いかけてようとして、足を止めた。

「クボ、ヒロミ！　お前たちは、コロニー内に入ってきてくれ。ウサが指示したように、ガニメデと地球に交信を試みてくれ！」

そう言うとしゲを追いかけて、シャトルに向かった。

その時、再びシャトルが大きな音を立てた。

「いや　っ！」

ヒロミの叫びは、爆音でかき消され、クボに引き摺られるようにしてコロニー内に入った。

シゲとタカはシャトルの後方の入り口の前に立ち、マサトとウサの生存を願っていた。

熱くなっているシャトルの後方の扉を開くと、熱風が押し寄せてきた。

「ここまでは破損していないな。早く入って、マサトとウサを」  
シゲが言い終わらないうちに、タカはシャトルに飛び乗り奥に進んでいった。

「ウサーっ！　マサトー！」

照明の消えた暗いシャトルの中を手探りで歩いていると、二人のすぐそばで呻き声が聞こえた。

「　っ！　ここに　いま　す　」

タカとシゲは走って、声のするほうへ向かった。ショートする火花に照らされて、マサトが見えた。

「マサトっ！　無事か！」

マサトは、額から血を流しながら、腕にウサを抱えていた。抱えられたウサはぐったりとしていた。

「ウサ！　ウサっ！」

タカが声を掛けても、呻き声一つ上げずに目を閉じていた。

「コントロールルームの　そばで、　爆発に巻き込まれたから　」

マサトが途切れ途切れに、ウサの状態を話そうとした。

「まずは、ここから離れよう。タカ、二人をレスキューボールに乗せてコロニーまで運ぼう」

タカはマサトからウサを受け取り、マサトはシゲの肩を借りて、

更に後方のレスキューボールのあるところに向かった。

レスキューボールは、シャトルからシャトルに移る時などに使われる一人、もしくは二人用の球体の移動用装置である。怪我をしているウサは、船外服を着てコロニーまで歩くのは不可能なので、レスキューボールを利用してコロニーに運ぶことにした。少々重たくなるが、重力の小さいエウロパなので、シゲとタカ二人いれば、何とかコロニーまで運べると判断した。

シゲは、レスキューボールの扉を開いて、マサトを先に乗せた。続いて、ウサをレスキューボールに乗せる。マサトが中から引つ張り上げ、何とか中に納まった。

シゲは、レスキューボールの扉を閉め、タカはレスキューボールの操作室に入った。タカはレスキューボールを船外に出すための長いアームを操作した。衝撃が少ないようにゆっくりと動かす。地面に着いたところで、レスキューボールからアームを外し、船内に格納した。

「じゃ、外に出よう。早く、このシャトルから離れないとアームを動かしていたタカが、シゲを促して船外に出た。」

レスキューボールの傍に駆け寄った二人は、両方から手を掛け、持ち上げた。軽いとは決していえない重さのボールを、ゆっくり慎重に、しかし早くシャトルから離れようと、確実に歩を進めた。

既に閉じられているコロニーの扉を、シゲは再び開け、コロニー内に入った。扉が閉じると、天井から空気が一気に入り込み、室内に酸素が取り入れられたことが分かった。

その時、閉じられた透明の扉の外が赤く光った。振り返ると、今離れたばかりのシャトルが更に爆発し、その衝撃で滑り止めになっていた岩の突起が砕かれた。シャトルは大きな音を立てながら、クレーター内に滑り落ちていった。着陸をした所には煙と粉塵があるばかりで、そこにはシャトルの姿はもうなかった。

シゲとタカは言葉もなく、その様子を見つめていた。シゲが「行

こう」と小さく呟き、更に奥の扉を開いた。扉の先には、ヒロミが二つのストレッチャーを用意して待っていた。

「マサトもウサも無事なの？」

シゲとタカは、返事をしないでレスキューボールの扉を開いた。中から血液の匂いが広がる。タカはゆっくりとウサを抱えて、レスキューボールから出した。ヒロミと二人でそつとストレッチャーに寝かせ、血液で額に張り付いた前髪を掻き上げた。

「ウサ、きつと助けてやるから」

一方シゲは、マサトに肩を貸し、マサトは自力でストレッチャーの上に寝た。

「三階に大きな医務室があるの。簡単な治療は出来そうだから、そこへ運んで」

ヒロミは、大きな瞳に涙を浮かべながらも、衛生士として行動した。

「クボは、通信室から交信を試みてる。シゲは通信室に向かつて。私は、二人の治療をするから。タカも手伝ってくれる？」

一刻を争う状態のウサを見て、ヒロミはウサのストレッチャーを押して、タカと共に三階に向かった。

「クボ。交信は出来るのか？」

シゲは通信室に入ると、クボの元に走った。見慣れないモニタを覗き込む。

「今、各方面に信号を飛ばしてる。誰かがキャッチしてくれるといいんだけど」

「そのまま続けてくれ。地球からの救助が近くまで来てるかもしれない。ここにいることが分ければ、きつと来てくれるだろうから」

「わかった。で、マサトとウサは？」

シゲは隣の席に座ると、頭を抱えた。

「ウサは意識不明。マサトも重傷だ。今ヒロミが手当をしてる。誰の命も失わず地球に帰りたいな」

クボは、それを聞いて目の前の台を思いっきり拳で叩いた。

「俺が俺がっ」

繰り返し拳を打ちつけるクボの腕をシゲは掴んだ。シゲには、クボの言わんとすることが解った。

「クボ！ 落ち着け！」

クボはシゲを振り解いて、頭を抱えた。

「船も爆発して、こんな誰もいない星に取り残されて。この信号を誰もキャッチしなかったら、俺たちここで俺のせいで」

「」

シゲは頭を抱えたクボを見つめていた。誰もクボを責めてはいない。しかし、クボにはそれもまた辛いのだろう。

「諦めるな。最善を尽くそう」

「うっ」

クボは、俯いたまま嗚咽を漏らしていた。シゲは、そつと立ち上がり通信室から出て行った。

「マサト ウサ 死なないでくれ！」

通信室の扉の外で、シゲはクボの叫びを聞いていた。

「クボ」

きつとクボはいつまでも責任を感じてしまうことだろう。無事、全員が地球に戻れても、クボはもう操縦桿を握らないかもしれない。そう思うと、シゲの気持ちも重くなった。

今はクボをそっとしておこうと、シゲは他の者がいる医務室に向かった。扉の前に立つと、中からマサトの呻き声が聞こえた。

「マサトっ！」

勢い良く扉を開くと、マサトが苦痛に顔を歪めていた。マサトの身体をタカが押さえつけ、ヒロミが火傷を負った部分を消毒していた。

「マサト、お願い　じつとして！」

ヒロミが、マサトの血で真っ赤にそまった脱脂綿を足元のゴミ箱に捨てた。新しく消毒液を浸した脱脂綿をマサトの傷に近づける。

「　う　うわぁっ！」

身を振り苦痛に耐えるマサトから、シゲは目を逸らした。

「ヒロミ、麻酔はないのか？」

「あるんだけど、マサトがウサに使ってくれて。マサトも相当辛いはずなんだけど」

「マサト、麻酔使えよ」

消毒液と血液の混ざった脱脂綿がマサトから離れると、息を荒くして首を振った。

「俺は、まだ我慢できる　。ウサのために取っておいて」

「でも、お前も裂傷や火傷が酷いんだぞ」

「　　この物には限度があるんだ。いつ救助が来るか分からない。残せる物は残しておかないと　。ヒロミ、このまま続けていいです」

ヒロミはため息をついて、また新しい脱脂綿を大腿部の裂傷に近づけた。血液の止まらない傷口を消毒する。脱脂綿はあっという間

に真っ赤に染まった。

「んっ あああっ！」

喉を仰け反らせて、マサトの身体が勢い良く浮いた。しかし、タカがすぐにマサトの肩をベッドに押さえつける。マサトはその細い身体から出るとは思えないような力で、身を擦じらせていた。

一通り消毒を終えると、ヒロミは開いてしまっている傷口を縫い合わせた。その間にも、マサトの悲鳴は止むことがなく、全てが終わった時には、息を荒くして、胸を上下させていた。

「マサト お疲れ様」

ヒロミの声に答える力もなく、全身を包帯で包まれたマサトは目を閉じたままぐったりしていた。

すでにコロニーに入ってから、約一時間が経過しようとしていた。

シゲはマサトの隣に眠るウサを見つめた。

「ウサは？」

「ウサはマサトより先に手当したの。火傷も裂傷もそんなに多くはないんだけど、足と肋骨が骨折してて、頭を強く打ったみたい。スキャンがないから詳しいことはわからないけど、意識がないのは頭を打ったせいかも」

ウサは眉間に皺を寄せて、そのまま眠り続けていた。

「一度も意識は戻らないの？」

「たまに、うわ言のようにタカの名前を呼んだり、痛いって繰り返すわ」

「タカが傍にいても反応はないの？」

「うん。目が開けられないからみたいだから。きつとかなりの痛みなのよ」

マサトとウサを交互に見た。マサトも目を開かず、荒い呼吸の間に唸ったりしていた。

「マサトに鎮痛剤は？」



「それは注射した。けど、効かないみたい。本当は麻酔を打ってあげたいんだけど」

その時、クボが医務室に入ってきた。

「シゲ。どこからかわからないんだけど、交信に反応があった。誰かがエウロパに近づいてるみたいなんだ」

「わかった。通信室に行く。ヒロミ、マサトとウサを頼む。タカも通信室に来てくれ」

タカはウサの手を一度強く握ってそつと離すと、包帯の巻かれた頭を撫でてベッドから離れた。隣ではマサトが歯を食いしばって、痛みをこらえていた。身体中に巻かれた包帯に、赤い色が滲んでいた。

「シゲ 役立てなくてごめん」

マサトが、少しだけ身体を起こしてシゲに話しかけた。大腿部の血液の染みが見る見る広がる。シゲはゆっくり身体をベッドに横たえた。

「お前は、身体を休ませておけ。麻酔なしの治療で体力を使い果たしたんだから。タカ！ クボ！ 急いで通信室に戻ろう。通り過ぎてしまわないうちに、ここにいることをアピールしなくちゃ」

三人は走って通信室に向かった。

「シゲ 二人の様子は？」

ウサとマサトの様子を見ていないクボは、通信室に向かう途中でシゲに二人の様子を聞いた。

「マサトは消毒と縫合を終えたけど、麻酔をしないで手術をしたから全身の痛みに耐えてる。ウサは、眠ったままだ。骨折、火傷、それに頭を強く打ったらしい」

「二人はシャトル内のどこにいたの？」

「あ、聞いてない。タカ聞いたか？」

「ああ。マサトの話だと、ウサはコントロールルームにいる時に地震にあつて。シャトルが滑り出したから、慌ててコントロールルームを出ようとしたんじゃないかって。コントロールルームの扉の外に倒れていたそうさ。マサトは、後方の動力室にいたんだけど、前方の爆発の衝撃で動力室も小爆発を起こしたらしい。なんとか動力室から出て、ウサのいるコントロールルームに向かったそうなんだ。途中の廊下は炎上していた箇所もあったらしいんだが、廊下に倒れてるウサを抱えて、炎の中を後方に向かつてる時に、俺たちと会ったって」

「そうか。で、今シャトルは？」

シゲが、通信室の扉を開けながらタカと顔を見合わせた。

「クレーターに落下したよ。もう、シャトルは使えない」

クボは一層落胆した表情をして、通信室に入った。シゲとタカも後続く。

「じゃ、交信を続けてくれ。一体どんな反応があつたんだ？」

席についたクボは、説明書のファイルを開けて、キーボードに手を置いた。

「かすかに音が入ったんだ。こちらから呼びかけても反応はしないんだけど、向こうから何か呼びかけているような音がするんだ」

クボはスピーカーの音量を上げて、耳を傾けた。

スピーカーからは、雑音とともに人間の声らしきものが入ってくる。途切れ途切れのその音は、徐々に鮮明なものになった。

「シゲ　の通信を　れんら　」

途切れながらも、聞き取れた箇所だけで、自分たちを探しに来たのだとわかった。シゲは更に一步前に出て、クボの操作するモニタに顔を近づけた。

「何とか向こうにこちらの声を伝えられないか？」

「ウサさえいれば　あの子には不可能がないのに　」

クボは、何度もマイクに向かって姿見えぬ者に向かって呼びかけた。

「こちら、エウロパ。こちらエウロパ。応答願います」

「　こちら　救助にむ　る　そち　の声は聞こえている　」

シゲは通信室の正面にある大きな窓から外を見た。大きな木星の横に小さく光る物体が近づいてきた。

「タカ　見えるか？　あの光ってる　」

「ああ。この交信相手だろうな　」

確実にこちらに向かってくる物体は、次第に輪郭を現した。

「あれは、地球からのシャトルじゃないか　」

「僕らの通信が途切れて、すぐに飛び立ってくれたのかな　」

シゲたちのシャトルが着陸した地点から少し離れた広大な敷地に地球からの救助のシャトルは止まった。扉が開き、船外服を着た者が四人降りて、こちらのビルに近づいてきた。

「タカ、下まで迎えに行こう。クボは医務室で待っていてくれ」

シゲは、タカを連れてコロニーの入り口に向かった。

「皆は無事なのか？　君らのシャトルがないが　」

四人の中の老人が口を開いた。

「　はい。今のところ、全員生存はしていますが　」

シゲは言葉を濁して、救助に来た四人を医務室に案内した。医務室に向かう途中、シャトルの発射事故の原因を聞いてみたが、老人が発射したときは、まだ何も説明されていなかったということだった。

四人が医務室内に入ると、クボとヒロミの顔に笑みが戻った。

「私たち助かるのね！」

喜びを隠せないクボとヒロミに対して、救助に来た老人はマサトとウサを見て暗い表情に変わった。

「この二人の容態は？」

「マサトは、火傷、裂傷、骨折。出血が多くて危険な状態です。ウサは、火傷、裂傷は軽いのですが、頭を強く打ったらしく意識が朦朧とした状態が続いています」

「もしかしたらと思って、医者連れてきたよ。ナオ、判断してくれ」

ナオと呼ばれた青年医師と一緒に来た青年二人が、ウサに近づいて包帯を解き始めた。

その時、沢山の人の気配に気がついたのか、マサトが目を開けた。そして、目の前に立つ老人を凝視した。

「あ　あの　時の　」

「そうか　覚えておるか。五年前、一回会っておるの」

「　ええ」

マサトは、記憶を蘇らせた。冷凍後四十年経つてるとか、ユウジは死んでしまったと伝えに来た、白衣の老人。忘れもしない、その老人の顔。

「わしの名前を、あの時は伝えなかったな。わしは　シュウじゃ」  
全員が老人の顔を見た。シュウといえば、シャトル内でマサトに聞いた名である。マサトと四十五年前にチームを組んでいた人物。

シュウはアングラから去ったって

全員の疑問が通じたかのように、シユウ老人はニツと笑ってマサトを見た。

「シユウはアングラから去った、とわしは言ったかな。本当はずっと東棟にいたんじゃない。マサトが冷凍保存されてから、冷凍保存の研究に身を費やしていたのだよ」

マサトが上半身を少し起こして、シユウ老人に近づいた。

「本当に　本当に、シユウ？」

「驚くのも無理ないな。あの頃は二十八歳だった。わしは今七十三歳じゃ。そうじゃ。ナオがマサトとウサの様子を見ている間に、昔話でもするかな？　それに　、伝えねばならぬこともある」

その時、ナオがシユウ老人に椅子を勧めた。シユウはゆっくりと腰を下ろし、視線をマサトに合わせた。

「マサト。影で調べておったようじゃが　ユウジの死の真相を知りたいんじゃない？　シゲも知りたかろう」

シゲもマサトのベッドの端に腰を下ろし、シユウ老人の話を聞いていた。

「それから、地球に帰ってきてからお願いしようかと思っていたことがあるのだが　ここで、お願いすることになるかもしれん」

「

マサトは、ナオに身体中の傷を確認されながら、シユウ老人の言葉に耳を傾けていた。

「どこから話せばいいかのう。四十五年前、マサトを冷凍保存すると聞いた時は本当に驚いた。そんな技術が完成しているなんて知らなかったからのう。ま、当時も今もテスト段階ではあるが、第一被験者が生還して来たのじゃ。この技術は完成したと言っても過言ではなかるう」

シユウ老人は一息ついて、マサトの顔を眺めた。

「マサトは当時と何も変わらないなあ。しかし、マサトが寝ている

間に、わしとユウジは変わったよ。地球に帰ってきてから、冷凍保存を知っている者として、東棟に移された。他の研究員たちに情報が漏れないようにという配慮だったのじゃろう。そして、冷凍保存の研究チームに入ったのじゃ。わしは、素直に喜んだ。幹部のみが入れる東棟に入れたのだから。しかし、ユウジは違っておった。人間の冷凍保存に反対だったんじゃない？」

「 シュウは、冷凍保存に賛成なのか？ 」

マサトは、目を細めて小さな声で聞いた。

「 もちろんじゃ。研究者として人間の命を操作できるなんて、こんな嬉しいことはない。このアングラにいる者は皆そうだと思っただけだ。 。しかし、ユウジはマサトの冷凍保存の件もあつてか、ずっと反対していたよ。研究に携りながら反対しているんだから。 「 冷凍される者の気持ちも考えてくれ 」 とか 「 早く、マサトを連れて帰りたい 」 ってというのがユウジの口癖じゃった 」

「 僕も反対です 」

そう口を挟んだのは、シゲだった。

「 人間は、自然の時の流れの中で生きるからこそ、一生懸命生きてるんです。他人の力で冷凍されて時を止められ、そしてまた他人の力で知らない世界に放り込まれて。そんな冷凍された人間のことを考えていないシステムなんて 」

「 ほう。 やっぱリユウジの息子じゃなあ。ユウジもそんなことを言っていたよ。マサトには自分の意思で生きてもらいたい。知的財産のために、知らない世界にひとりぼっちで目覚めさせるのは、あまりにも可哀想すぎるとな 」

シュウ老人とシゲとのやりとりを、マサトは目を閉じて聞いていた。

「 しかしな、シゲ。 わしも研究に携ってわかったことなのだが、この人間の冷凍保存のシステムは、知的財産を守るために開発された訳ではないのだ。 もともと、病人の輸送用に開発が始められたのじゃ。 」

まだ、エウロパの開発が始まったばかりの頃、エウロパで重体の怪我人、病人が出た時に、エウロパでは納得のいく治療が出来なかったんじゃない。かといって、地球に帰る体力も残っていない。そんな重体の人間を、息のある状態で冷凍して地球に輸送し、地球で解凍して治療をする。そんな目的で、開発が始まったんじゃない。

しかし、完成間近になって、東棟の幹部たちは別のことを考えた。冷凍保存を利用すれば、今までは時の流れの中で失くしてしまった、優秀な技術者、研究者たちを、いつまでもこのアングラに残す事ができると考えたのじゃ。そんな時、当時知的財産と言われたマサトがウイルスに感染した。冷凍保存の機械はすでに完成もしており、あとはテストを残すのみだった。そこで、マサトは第一被験者となったのだよ。冷凍保存された人間を、輸送する技術がまだ開発されていないから、当初の目的。重体の輸送は果たされていないが、知的財産を残すことには成功した」

「え？　じゃあ、俺はどうやって地球に帰ったんだ？　冷凍保存のまま輸送する技術はまだ完成していないのか？」

「輸送用保存器の試作機を一機だけ作ったんじゃない。それをこのエウロパに持ってきて、マサトを移し、地球に帰還させたんじゃない。その後、輸送用の保存器には致命的な設計ミスがあることが解つてな。マサトが戻って来られたのは、奇跡じゃよ」

誰もが押し黙って、シウウ老人の話を聞いていた。このアングラの裏側で行われている研究。それは、人間の尊厳を無視したような研究だった。しかし、マサトは冷凍保存されなければ、確実に四十五年前にこのエウロパで命を失っていたのだ。反対すれば、マサトの存在を否定する。賛成すれば、マサトの苦悩を理解してやれない。そんな狭間で全員が口を固く閉じていた。

マサトは、新しく包帯を巻きなおされた胸に手を当てた。

「ユウジは？　ユウジは何で死んだ？」

「ここまで聞いてもわからないのか？　あんまり冷凍保存に反対する

から、殺されたんじゃ。一緒に事故にあつた二人も、冷凍保存の研究職にありながら強く反対していた者なんじゃ。表向きには発表されていないが、今アングラでは、ガニメデやエウロパの開発よりも、冷凍保存の研究に力を入れておる。事故にあつたユウジたち三人は、完成した冷凍保存器を壊そうとしたのじゃ。危険分子として東棟から追い出された三人は、ガニメデの開発に移された。そして他言されては困ると、永久に口を封じた」

何の感慨もなく淡々と話すシユウ老人の言葉に、シゲは顔を高潮させた。「誰がそんなことを」と呟きながら立ち上がり、胸倉を掴もうとした瞬間、目の前からシユウ老人が消えた。

シゲよりも早く、タカがシユウ老人を殴り倒していた。

「どうして！ どうして、そんなことが言えるんだ！ 仲間が冷凍保存されて、冷凍保存に反対した仲間は殺されて！ 二人ともお前の仲間だつたんだろう？ それでも研究第一なのかよ！」

「老人を殴るとは、ひどいのう。 わしは研究第一じゃ。 仲間を犠牲にしても、未来のために完成させなくてはいけないものがある。未来の沢山の命を救うことになるのじゃ、この研究は」

よろよと立ち上がりナオの肩を借りて、再び椅子に座った。

シゲは、タカの突然の行動に驚いて、シユウ老人を殴ろうとした思いがどこかへ拡散されてしまった。

「タカ」

「シゲが手を汚すことはない。こんな奴。仲間を何とも思わない奴

研究者の風上にも置けない」

タカは殴った拳を解くことなく、握り締めて震えていた。

「さて、ナオ。二人の様子はどうじゃ？」

タカは、尚飄々とするシユウに更に殴りかかろうとした。が、クボがそれを押さえていた。

「耐えられそうにありません」

「何がだ？」

マサトは不安そうに、自分から手を離れたナオを見た。



「それでは、ここでお願いしようかの。もっとも、ウサは意識がないからお願いも何もないがな」

シュウ老人はゆっくりと立ち上がり、マサトの顔の近くに歩み寄った。

「本来なら、地球での予定だったのじゃが」

そう言って、一呼吸置いた。マサトの表情にさらに不安が広がる。

「マサトをもう一度冷凍保存する」

「マサトをもう一度冷凍保存する」

「え？」

全員の動きが止まった。

「先ほど話したように、本格的に知的財産の保存に冷凍保存を利用したいのじゃ。本来なら、今回のプロジェクトが終了したら、地球で冷凍保存する予定だったのじゃが、このような事故に遭ってしまった。今、ナオが調べたところによると、二人とも地球に戻るには、体力が持たなくて危険とのことじゃ。だから、二人にはここで眠ってもらう。地球へ輸送することは出来ないの、解凍はこのエウロパが開発を完了した時になるかの。エウロパで治療が出来る状態になつたら解凍しよう」

シウウ老人は軽く言つてのけ、ナオが注射器を持つて近づいてきた。

「えっ やっやめてよ！ どうして？ 俺の能力が何だつて言うんだ。エウロパでウイルスに感染したのも、ここで事故に遭つたのも俺の運命なんだ！ どうして、好きに生きさせてくれない！ また、何十年か眠らせるつもりなのか？ また俺を知らない世界で一人ぼっちにする気かよ！」

マサトは、シウウ老人に掴みかからんばかりに抗議した。自然と瞳から涙が溢れ出す。

「マサトの思考能力、技術。すべてがこのアングラに永久的に必要なんじゃ。それに 安心せい。ウサもここで眠るし、シゲ、タカにも地球で眠ってもらう予定じゃ」

「何っ！ 僕たちも？」

シゲは思わず一步下がり、後ろにいたクボにぶつかった。

「大したことではないわ。眠って目覚めたら数十年経ってたというだけじゃ。身体に影響が出ることもない。すでにマサトで実証済みだからな。さてマサト。お前をこのまま見殺しにはできんのじゃよ。ウサと共に、ここで眠れ」

「嫌だ！ 頼む。もうほつといてくれ！ ウサにも俺と同じ思いをさせたくない！」

「見る。ウサは一生懸命生きようとがんばっているのだぞ。再び、仲間達の顔を見るために、生きようと必死に頑張っておる。そんなウサの思いは、何とも思わんのか？」

横を見ると、苦痛に小さく唸りながらも、呼吸を繰り返すウサの姿があつた。タカは、ウサの手を握り締めて唇を噛み締めていた。

「自分勝手なことばかりいうお前のことは許せないが、今はマサトとウサをここで冷凍保存させて、僕とタカが地球で冷凍保存されるのが一番賢明だと思う。しかし、条件がある。僕たち四人を同時に解凍し、その後はこのアングラから出て行く。解凍後リハビリしている間だけは、知的財産としての仕事をこのアングラでしよう。しかし、その後の僕たちには構わないで欲しい」

シゲは、俯いたままシユウ老人に提案した。誰も傷つけず、誰も悲しまない方法。冷凍保存される者にとって最大の悲劇は、知る人のいない世界に投げ出され、一から人生を歩まなくてはいけない事である。

しかし、四人同時に冷凍保存され、同じ時に解凍されれば、その悲劇は少なくとも軽減される。そして再びこのような悲劇を起こさないために、四人ともこのアングラから出て行くのが一番いいように思えた。このアングラに冷凍保存の技術がある限り、他の誰かがこの悲劇を体験するのだろうか。

「ふむ。残念だが　その条件を飲むとしよう。わしとて、人の命を大切に思っており。四人同時に解凍させるのは、自然の時間の

中で生きるクボとヒロミに任せるとしよう。それなら安心じゃろ？  
マサトとウサを、このまま見殺しにはしたくないからな。マ  
サト、今のシゲの条件を聞いておったか？」

マサトは、力なく天井の一点を見つめていた。

「マサト？ マサト聞いているか？」

マサトは、目を閉じて小さく呟いた。

「シゲ　これが　俺の運命なんすね。前の冷凍保存の時も、ユウジに説得された。俺の人生は、シゲの中を流れる血に翻弄されてる。でも、シゲもユウジも好きだから　それでも構わない。今度はシゲも一緒に、次の世界に行けるし」

マサトの脳裏には、ユウジの姿があった。ガラスを隔てて、「生きてくれ」と何度も言ったユウジの姿。必ず迎えに行くという約束は、アングラの陰謀で果たされなかった。目覚めたときの環境の違いに驚き、世代の違う人間の中で生きて行く違和感。迎えに来てくれるといった仲間の死の悲しみ、知る者の居ない世界での生活の苦しみの中で、シゲやこの仲間たちと過ごしていくうちに次第に新しい世界に慣れた。この世界の人間として生きて行くことに、楽しみを覚えた今、またあんな悲しみを味わうのは嫌だったが、今度は違う。今度こそ、シゲは迎えに来てくれる。地球で解凍されて今の姿のまま、このエウロパまで迎えに来てくれる。クボとヒロミが、確実にシゲとタ力を解凍して、皆で迎えに来てくれると信じられる。きつと。

小さく口を結んで、目を開いた。軽く眉間に皺を寄せて、小さく笑った。

「わかった。また、眠ることにしよう。必ず、四人同時に解凍してくれ。もし、守られなかったときは」

「わかっておる。約束は必ず、クボとヒロミが守ってくれるじゃろう。わしは、もう先が長くないからなあ」

ふっふっふ、と小さく笑って、視線をナオに移した。

「では、準備をしようかの。ナオ頼む」

ナオはマサトの腕を掴んで肘の辺りの包帯を解いた。

「この注射には、冷凍中に血液が固まらないようにする薬と、睡眠作用のある薬が入っています。前回の時とは違う注射になります。心配はいりません。血液中を薬が回りだすと、すぐに眠くなります。何か話したいことがあれば、今のうちに」

そういつて、一旦マサトから離れた。ウサに近づき、肘の裏側に注射の針をあてがった。タカは、ウサの手を握り締めたまま、注射の液がウサに流れ込むのを見つめていた。

「必ず迎えに来るから。元気になったら、また一緒に美味しい物を食べに行こう。必ず 必ずっ」

言葉を詰まらせてベッドに顔を伏せるタカの肩を、クボが後ろから抱きしめた。

「俺が、お前らを絶対目覚めさせるから っ！」

タカとクボが、ウサの呼吸が静かになったのを見守っていた頃、マサトは何も言わずに、シゲとヒロミを見つめていた。ヒロミは、ポロポロと涙を零して、マサトの手を握っていた。

「マサト、私、絶対死なないから。マサトを解凍するまで、絶対生きる。そして、シゲと迎えに来るから。今度はきっと悲しい思いをさせない！」

マサトは頷いて、口を開いたシゲを見つめた。

「親父が守れなかった約束。僕が必ず守るから。安心して眠ってくれ」

「次の世界では、自由に生きる。自然の時間の中で生きれるんだよね？ 精一杯生きて、自然の時の流れに身を委ねたい」

マサトは、ヒロミの手をそっと離してナオの方を向いた。

「お願いします」

注射の針がそっとマサトに近づき、針の先がマサトの腕に埋まった。

「シゲ　待つてる　待つてるから　」  
ゆっくりと目を閉じて、呼吸が緩やかになった。閉じた瞳から、一筋雫が落ちていった。

シゲは低いモーター音と共に白くなっていく二本の円柱を、黙って見つめていた。二度と会えない訳ではない。これは、マサトとウサを生かすための判断だったのだ。

悔いはない。

そう思っても、マサトの最後の涙が忘れられなかった。

信じていた仲間に裏切られた約束。同じ血が流れる者と再び結んだ約束。マサトの中には不安がなかったと言い切れない。

しかし、絶対守る。今度は解凍してくれる仲間もいる。目覚めたとき、マサトに笑顔が戻りますように。それだけを、シゲは願っていた。

シウウ老人の乗ってきたシャトルで地球に帰還したシゲ、タカ、クボ、ヒロミは、冷凍保存の日を一週間後と定め、それまで自由時間を過ごすこととなった。

タカは、ウサの思い出を辿るように、北棟の研究室へと足を向けた。目的地はもちろん、ウサの入り浸っていたヒルのいる研究室である。ノックをすると、すぐにヒルの返事が帰ってきた。間もなく、扉が開けられ、ヒルが顔を出した。

「やあ、タカ。おかえり。どうしたんだい？　ウサも一緒じゃないなんて珍しいじゃないか。ま、入れよ」

中に入ると、入れたてのコーヒーの香りがしていた。いい香りのコーヒーをもらい、無造作に置かれた椅子の一つに腰をかけた。研究室にはヒルしかいなかった。いつもなら、ユウセイも共に研究を進めている。

「今日は、ユウセイはいないんですか？」

ヒルは、少し驚いたように手を止め、自嘲的に笑いながらコーヒークップに手を伸ばした。

「何も聞いていないのか」

ヒルはそう言う一口コーヒを口に含み、暫く口の中で味わうようにしてゆっくりと飲み下した。それは、次の言葉を考えているようでもあった。

「ん。ユウセイはいなくなつたよ。昨日　だつたかな。君たちが戻るといふ噂を聞いたとたん姿を消したよ」

「え？　どうして？」

「つまり　簡単に言うと、奴が犯人だつたのかな。　今では何も解らないけど。ま、簡単に言えば妬みかなあ？　いや、優しさかな？　君たちの誰かが知的財産として扱われるという話が広がつて、そんな優遇される者を妬む人間はここにいっぱい居ると思うよ」

「　知的財産になつたつて、何一ついいことはないですよ」

「　ひよつとして、ウサはエウロパ？」

感の鋭いヒルは少し間を置いてそう言ったが、タカは表情を動かさなかつた。

「ま、僕は興味ないけどね。でも、ウサに会えないのは残念だ」

「ユウセイが本当に犯人なんですか？」

「さあね。まだこのチームも、手がかりは掴んでないんじゃないな。誰が犯人かなんて、犯人以外にはわからないし、犯人探しもしないかもしれないね。　そうだね。単に、僕はユウセイが犯人である確率が高いな、と思っただけだから」

ヒルは小さく笑つてコーヒークップを口に運んだ。

「どうしてそう思うんです？」

「ん。　長く一緒にこの研究室に居たからね。何となく。それに、最後にウサがここに来たとき、シャトルに乗らないでこの研究室に來ないかって誘つてた。ユウセイが最後の手を差し伸べたんだろう

ね」

「最後の手　？」

タカは首を三十度ほど右に曲げた。

「いや。推測でそんなことを言っちゃいけないか。ひよつとしたら、僕が犯人かもしれないしね。ガニメデ行きを何度も志願しても、年齢制限で連れて行ってもらえなかったから。若い者ばかりが集まった今回のシャトルの乗務員を恨んでたとか」

軽く言つてのけ、ニコニコ笑っていた。

「ヒルさん　シャトルに乗りたかったの？」

「いや。ここで乗りたかったなんて言ったら、タカは僕を疑っちゃうでしょ？」

「う　ん？」

「他の可能性もあるよ。東棟の幹部が事故を起こさせたのかも。コントロールセンターには異常がなかったっていう話だけど、ひよつとしたらアングラぐるみで君たちを殺したかったとか」

タカは、背筋に寒気を感じた。有り得るのだろうか？

「そんな　どうして？」

「ん　。解らない。あそこは何をしてるか解らないからね。動機を聞いてもピンと来ないような理由かもよ」

「怖いなあ。ここで安心して仕事できないよ。それに俺これから

」

冷凍保存になるのに、という言葉は飲み込んだ。決して他人に話すようなヒルではないが、今は何も言わずに消えたほうがいいように思えた。

「ユウセイのいるところを知らないですか？　一番、何かを知っていそうですね？　あいつの居る所へ連れて行ってください。」

「うん、大体検討が付くから。連れて行っても構わないよ。今日の十九時にロビーで待ってて。一緒に行こう。あ、そうだ。これを持って行つて」

ヒルは、机の下に置いてある半透明のプラスチックのケースから、



一着の恒温服を取り出した。

「ウサに頼まれて、新しく開発した恒温服だ。頭部の湿度調節まで出来るタイプだよ」

「湿度？ そんなに、湿度が上がるまで、これを着て外出しちゃまずいでしょ？」

「僕もそう言っただけだね。ウサは、外で遊びたいんだってさ。あの年で、可愛いっていうか、バカっていうか」

タカはお礼をいい、部屋を後にした。歩きながら、ウサの頼んでいた恒温服を抱きしめる。地球に帰ってきて、これを着て外を散歩して回れたかったのだろう。よく珍しい形の石を見つけては、タカの元を持ってきたり、日影に草でも生えていると「勿体無いかね」などと言いながらも引っこ抜いて自室に飾っていた。そんなウサの姿を思い浮かべて、少し胸が苦しくなった。

軽く頭を振って、深呼吸を一つする。気持ちを切り替えて、他の犯人と動機の可能性について考えてみた。クボはロビーで寝ている時に、シゲが見知らぬ人を見たと言っていた。しかし、研究員、技術員の多いアングラ内では、見知らぬ人がいても大して不思議ではない。しかし、それが本当だとすると、外部から誰かが事故を起こした可能性もある。そうなると犯人は捕まりにくいだろうな、と思った。ここはやはり、自分たちが戻ってくると聞いた途端、逃げ出したユウセイにいろいろ話が聞きたかった。

十九時まで、まだ三時間ほどあったので、シゲの部屋に向かった。

シゲの部屋をノックすると、上半身裸でシゲが顔を出した。

「お？ どうした？ どこか外でゆっくりしてくるんじゃないのか？ ここにいたら、ウサのことばかり考えちまうだろ？」

部屋の中に招きいれながら、床に散らばっているＴシャツを着た。

「風呂に入るところだったのか？」

「いや、風呂は面倒だから、身体を拭いてたところだ」

「何で面倒なんだよ？ シャワーくらい浴びればいいのに」

「だってここは、空調がいいから汗かかないもん」

苦笑しながらソファに座ったタカは、シゲから冷たい麦茶を受け取った。

「何か話か？」

「ああ。今、ヒルさんの所に行ってたんだ。何となく足が向いたっていうのかな。ウサと一緒に良く行ってたから。それで、ちょっと情報を仕入れたんだ」

シゲは欠伸をかみ締めながらタカの隣に座った。

「情報？ あの事故の？」

「ああ。俺たちが帰ってくるのを聞いて、ここから逃げ出した奴がいるんだ。俺たちを殺すのに失敗して、逃げたってとこなのか」

「誰だ？ そんな奴がここに？」

タカはまだ犯人とは確定されていない人間の名前を出していいものか悩んだ。

「犯人とは決まってるないんだろ？それを承知した上で、聞くから」

「」

「ん。ユウセイだ。ウサが入り浸ってた、ヒルがいる研究室に一緒にいた男だ」

「僕、あつたことないなあ」

「理由がわかんないんだ。ウサや俺たちと、殺したくなるほどの接点があつた訳じゃない。だから話を聞きに、今晚ユウセイに会いに行くことにした」

「居場所は解ってるのか？」

「ああ。ヒルが思い当たるところがあるって」

シゲは、暫く黙って腕を組んだ。

「俺が、事故の前日にロビーで怪しい奴を見たっていったら？あれから、ずっと考えていたんだが、ひよっとしたらクボは知って

いるんじゃないかって思ったんだ」

「え？ どうして？」

「俺あの時、南棟からロビーに入って、北棟に行ったんだ。その時に、ロビーでクボが寝てるのを確認したんだけど。それで、北棟からロビーに戻ってきたときに、ちよつと争うような小さな話し声をしたんだ。ロビーのソファはパーティションで区切られてるだろ？ 誰かは見えなかったんだけど、出てくる気配があったから、思わず近くの受付の下に隠れたんだ」

「で、その時にウサが外から帰ってきたのか？」

「ああ。クボはあの時、起きてたんじゃないかと思うんだ。あの首の受信機は承知の上で埋め込まれていたんじゃないかと」

タカは思わず、ソファに座りなおした。

「そんな！ それじゃ、クボが仕組んだってことかよ？ 仲間がそんなことするはずは」

「解ってる！ そんなことは解ってるよ！ でも」

「クボにはこのことは言わないでくれ。あんなに必死に助かろうと一緒に頑張った仲間だから。俺は、信じてない」

「ごちそうさま」と床にグラスと置き、タカは立ち上がった。気まぐずい雰囲気の中、タカは静かに部屋を出て行った。

「僕だって信じたくないよ。でも」

シゲは目を閉じて、事故前日のロビーの様子を、もう一度思い出していた。

タカは、十九時にロビーへ行くと、既にヒルが待っていた。

「タカの名前で遮光車を借りてくれないかな？　僕は、車の扱い荒いから、受付の子たちに嫌われてるんだ」

タカは受付で遮光車の貸出を申請し、ヒルと共に地下駐車場に向かった。

十五分程走って、小さなビルの地下駐車場に入った。ヒルは、トランクから荷物を出し、すたすたと扉に向かって歩き始めた。タカは慌てて追いかけて、ヒルと共にエレベータに乗った。

三階で降りると、そこには廊下ではなく、広いフロアが一つあるだけだった。書類棚のようなスチール製の棚がいくつも並ぶ方角に向かつて、ヒルは声を掛けた。

「ユウセイ！　ここにいるんだろ？」

書類棚の向こうから、ユウセイが顔を出した。タカの顔を見て、一瞬青ざめたようだった。

「ヒルさん？　どうしてこいつを連れて来たの？」

「来たと言って言ったから。まずかった？」

ユウセイは再び姿を消すと、どこかへ逃げ出すような素振りを見せた。タカは走ってユウセイを追いかけて、床に組み伏せた。

「どうして逃げるんだ？　何かやましいことでもあるのか？」

「何も無いよ。ヒルさん　何で連れてきたんだよ」

ヒルは、荷物を床に置き、ゆっくりと近づいてきた。

「ユウセイが突然いなくなったからね。事故ったシャトルのクルーが帰ってくるって聞いた途端いなくなったから、何か知ってるのかと思って。タカもその事で聞きたいことがあるそうだ」

タカはユウセイの上に乗ったまま、腕を締め付けるのを緩めた。

「ユウセイ。知ってる事を話してくれ」

「知らない。何も知らないよ」

「じゃあ、どうしてそんなにタイミング良くアングラから消えたんだ？」

「偶然だよ、偶然」

ヒルは苛立ったように、ユウセイの顔の前にしゃがんだ。

「偶然なものか。いつも言ってたじゃない。知的財産の人間を冷凍保存する噂は本当だって。そして、そんなことには反対だって」

「そんなこと　っ」

「いつも僕に言ってたじゃん？　大っぴらに反対すると殺されるから言えないけど。見たんでしょ？　ここに入っただけに、ガニメデで人が殺されるのを見ちゃったって言ってたよね？　許せないって」

タカは思わず、ユウセイの上から床に降りて、ヒルの顔を凝視した。

ガニメデで殺された人を見たって？　それって

「どういうことだ？　詳しく教えてくれ！」

青い顔のまま床に座り、ぽつりぽつりと話し出した。

「俺がここに来て間もなく、ガニメデの開発要員としてガニメデに向かったんだ。ビルを建築する仕事だった。その時、仕事だったにも関わらず全員に休憩の命令が出たんだ。まだそんな時間じゃなかった。しかし、地球から幹部が偵察に来ていたとかで、全員現場の事務所に戻るよう言われたんだ。俺も一旦は事務所に戻ったんだけど、現場にタバコを置いてきたのを思い出して、事務所から外に出たんだ。その時、地球から来たという男が五人くらい建設中のビルに登っていった。その後、タバコを取って、何となく上を眺めながら戻ってたんだ。そしたら、三人の男がビルから落ちてきた。その時、見たんだ。残った二人が三人の背中を押していたのを。」

その後、上に残っていた男の一人はシュウと呼ばれていることがわかった。そして死んだ三人は、冷凍保存のプロジェクトの反対派

ということがわかったんだ。都合の悪い人間を殺してまで勧める冷凍保存のプロジェクトに、俺は反対だった。しかし、殺人現場を見たと言っても証拠はないし、そんなことを声高に叫んだら僕も殺されるだろうからね。だから、今まで黙っていたんだ」

「そんな。シウがシゲの親父を殺したっていうのか」  
タカの小さな呟きは、二人の耳に届かなかった。小さく息を吐いて、ユウセイに届くくらいの声で聞いた。

「それで？ それで、お前も冷凍保存に反対だが、声高に叫ぶと殺されるからって、俺たちを殺してアピールしようとしたのか？」

ユウセイは青い顔のまま強く首を振った。

「違う！ 殺そうとしたんじゃない！ 殺したいわけじゃないんだ！ 辛く長い人生を送るよりは、今ここで事故に遭った方が幸せじゃないかって。ここにいつまでも縛られて、親しい人の居ない世界に何度も目覚めるよりも、事故に遭ったほうがいいんじゃないかって。ウサが知的財産になるって聞いたから。冷凍保存になんてさせたくなかった」

ユウセイは、自分のしたことは決して悪いことではないと信じているように叫んだ。ヒルは、感情を押し殺したまま、冷たい声でユウセイに話しかけた。

「ユウセイの冷凍保存の反対理由は何だった？ 人間の手で、人間の人生を操るなんてモラルに反してるって言うてたでしょ？ でも、ユウセイのやってることはそれと何ら変わらないことだよ。そんなことでウサをあんな危険な事故に遭わせたのか？」

ユウセイは、床に頭をつけてただ首を振っていた。ヒルは、そのまま胡坐で床に座り、更に続けた。

「大体、ユウセイが言ってた知的財産者の冷凍保存だって、ただの噂だろ？」

ユウセイが答えない代わりに、タカが小さな声で答えた。

「いや、本当だ。知的財産者を冷凍保存する技術がここにはある」  
ユウセイは青い顔を持ち上げ、ヒルはタカの言葉を小さく口の中

で復唱しているようだった。

「え？ 冷凍保存の技術がここにあるって？」

「ああ。マサトとウサは、負傷して帰ってきてることになっているが、本当はエウロパで冷凍保存されている。向こうで負傷して、地球に戻る体力がないから、仕方なく」

タ力は、マサトとウサの眠る顔を思い出し、一時目を閉じて深く呼吸をした。胸の奥から込み上げてくる何かを飲み込み堪えて続けた。

「マサトもウサも、エウロパで眠っているんだ。ユウセイ。お前のやったことは、理由がどうであれ、許せないことだ。俺も冷凍保存には反対だ。しかし、反対だからといって、冷凍保存になる人間を殺していい理由にはならないだろう？ それがその人間のためだと言っても、決して認められることではない。確かに今回、マサトとウサも冷凍保存で眠るよりは、このまま自然の時間の中で命が消えて行くほうが幸せなのかもしれないと思った。しかし、それは俺たちの決めることじゃない。今回の冷凍保存は 治療のための冷凍保存だ。決して知的財産を守るための冷凍保存じゃない。だから俺たちはマサトとウサを 置いてきた」

最後の一言を搾り出すように言ったタ力は、そのまま黙り込んでしまった。

そのまま暫く三人は黙ったまま座っていた。窓の外では、風が吹き荒れ、砂埃が窓に打ち付けられていた。一際大きな音がした時、それがきっかけのように、ユウセイが語りだした。

「僕はただ、冷凍保存を反対しただけだ。それで、仲の良いクボに話をしてみた。一緒に飛ぶ仲間が冷凍保存になるかもしれないと聞いて、心底驚いていたよ。それで提案したんだ。シャトルが事故に遭って、冷凍保存になる人間が消えれば、冷凍保存は実行されないって。大切な仲間が、辛い未来を送るのを救えるって教えたんだ。

シャトル打ち上げの二日前にプログラムを書き換えるように言ったんだ。クボは前日の健康診断で不調を訴えれば、補欠クルーが搭乗することになる。そうすれば、クボは事故に巻き込まれない。そして打ち上げ前日に事故を起こすようにしたんだ。

でも、プログラムの書き換えが終わった打ち上げの二日前の午後に、クボは「こんなことやめよう」と言い出したんだ。もう、準備は完了してるのに。クボの手で準備をしたのに、そんなことを言うんだ。「最終訓練には俺が出る。書き換えたプログラムは破壊して正常なプログラムに戻す」なんて言い出したんだ。だから僕は、クボを混乱させた。そんなこと考えられないように。脳を混乱させる電波を発信する機械を、クボに埋め込んだんだ」

「ひよつとして、それは事故前日のロビーで？」

タカはシゲの話を思い出していた。クボがロビーで起きていたんじゃないかと言っていた。話し声がしたとも。それは、クボがユウセイと話をしている声だったのだ。

「そう。あそこで寝ているクボを見つけて、プログラムの書き換えが終わったかを確認したんだ。そしたら、そんな事を言い出すからあの場で、埋め込んだんだ。特殊な器具を使えば、簡単に埋め込めるからね」

タカはポケットに手を入れた。もぞもぞ動かしてから何かを握って、ポケットから手を出した。指を開くと、クボに埋め込まれていた受信機と、シャトルに設置されていた発信機があった。

「これだろ？」

「クボは何も言わなかったのかい？」「僕がみんなを殺そうとしたっつて？」

無理に笑いながら聞くユウセイに、タカは眉間に皺を寄せて目を細めた。

「ヒルさん。もう帰ろう。こんな奴ともう話なんてしたくない」

タカは立ち上がると、出口に向かって早足で歩き出した。その時、ユウセイが後ろから声を掛けた。



「タカ！ お前も冷凍保存されるんだぞ！」

足を止めたタカは振り返りもせず<sup>ず</sup>に答えた。

「知っている。冷凍保存には反対だが、怖くもないし、不安もない。大切な人と一緒に目覚めるために眠るんだ。知的財産なんて関係ない。俺の意思で眠って、俺の意思で目覚めるんだ。他人にとやかく言われる筋合いはない」

ヒルも立ちあがり、タカについて部屋から出て行った。

そして、タカはこの件を誰にも告げず、南棟の自室で冷凍保存の日まで静かに暮らした。

冷凍保存当日。シゲとタカは、共に東棟に初めて足を踏み入れた。指示された部屋は、東棟地下五階、一番地下のフロアの一室だった。部屋には、シユウ老人がとクボ、ヒロミが待っていた。

「ここには、三機の保存器がある。そのうちの二機を使って君たちを保存する。解凍時期は今は限定しない。エウロパの開発が完了して、マサトとウサを解凍できるようになったら、まず地球でお前たち二人を解凍し、エウロパに送ろう。そこで、マサトとウサの解凍に立ち会ってくれ」

シユウ老人はそれだけ言うと、黙って作業を始めた。保存器の扉を開け、機器の状態をチェックする。その作業を眺めながら、部屋の隅にある無機質な椅子に四人は腰掛けた。

「クボ。この間、ユウセイに会ってきた」

タカは、唐突にそれだけ言うと、床を見つめた。クボが驚いて自分を見ているのを感じて感じた。しかし、それ以上タカは何も言えなかった。

「全部聞いたんだね。僕には、このままここで生きて、タカたちを目覚めさせる権利なんてないんだ。そう、生きてる権利すらないんだ。やっぱり僕」

「いや。逆だよ。必死になって俺たちを守ろうとしてくれたじゃないか」

「でも！ きつかけは僕が作ったんだ！ あの脳に送られてくる電波に耐えられなかった！」

ヒロミは、オロオロしながらタカとクボを見つめていた。シゲも口をはさむタイミングを見計らっているようだった。シゲは、タカがユウセイに会いに行くという話を聞いてから、一度も会っていないのである。ユウセイと何を話したのかを聞きたいと思っていた。

「タカ。ユウセイと何を話して来たんだ？ あれから、お前は部屋に籠りっ放しで」

タカは黙って首を振った。

「タカ 僕が話すよ。僕がもつと早く話すべきだったんだ。でも、できなかった。あの場で信用されなくなるのが怖かったんだ。絶対に、みんなを地球に返さなきゃって、それだけを思ってた」

「どういうことなの？ 解るように説明してよ」

困惑した表情のまま。ヒロミがクボに問い掛けた。

「あのシャトルの事故は、僕が仕掛けたんだ」  
「何だって？」

ヒロミよりも早く、シゲが大声を出した。ヒロミも「えっ？」と口を押さえ、クボを見つめたまま動かない。

「ユウセイに、冷凍保存の話を聞かされたんだ。今回のシャトルに乗るメンバーのうちの何人かが、知的財産保存の目的で、冷凍保存されるって。冷凍保存されることは辛いことなんだって、そう言ってた。眠らされて、何十年後の環境のまったく違う、知らない世界で目覚めさせられるっていうんだ。一体誰が冷凍保存の対象者なのかは聞かなかったけど、それは可哀想なことだと思った。そして、冷凍保存を声高に反対すると殺されるって言ってた。だから、皆を冷凍保存から救う方法は、シャトルを事故に遭わせて」

そこで、口を固く結び手を強く握り締めた。

「発射予定の二日前に、シャトルのプログラムを変更したんだ。コントロールセンターのプログラムの変更は、ユウセイが手配したらしい。でも、プログラムを変更し終わってから、目が覚めたんだ。僕のやっていたことは間違っていたって。こんな事が冷凍保存者を救ったことにはならないってね。だから、最終訓練の直前にプログラムを破壊して、正常に戻そうと思ったんだ。」

プログラムを変更し終えてロビーで休んでいた時に、ユウセイが僕の前に現れたんだ。僕は、プログラムを正常に戻すとユウセイに

伝えたんだ。そしたら　そんなことはさせないって　脳に電波を送る機械を、僕に埋め込んだんだ」

「どうしてそんな　。いくら可哀想だからって　下手したら私たち死んでいたのよ！」

「わかつてる！　馬鹿なことをしたって後で気がついたよ！　でも、話を聞いたときは、冷凍保存にさせちゃいけないって思ったんだ。誰が対象者かは解らなかったけど、その時にマサトとウサのことを思い出したんだ。」

あんなに楽しそうに過ごしているあいづらが、全然知る人のいない世界で暮らすことになったら　って。タカたちが死んだ後の世界で、このアングラに技術提供、監修をするために生き続けていかなくてはいけないなんて。可哀想だと思ったんだ　」

「でもクボは必死に俺たちを助けようとした」

タカは顔を上げて保存器を見つめた。準備はほぼ完了しているようだった。そのまま視線をクボに動かして言った。

「電波に脳を犯されながらも、必死に抵抗してたんだろ？　結局はイオ行きのプログラムを作ってしまったけど。必要以上にプログラムの入力に時間が掛かって、最後に気絶するまで抵抗してた。最後に言った言葉はクボ自身の言葉だったんだろ？」

「最後の言葉？」

そう聞いたのはヒロミだった。

「倒れる直前、「マサト、頼む」って言ったよな」

クボは力なく頷いた。

「クボ、僕はまだクボを信じれるよ。ここに残って僕たちを目覚めさせてくれ」

シゲはそう言って立ち上がった。ゆっくりと扉側に設置されている保存器に向かって進んだ。

「お前が、僕たちの眠りを見守ってくれ」

ゆっくりと立ち上がったクボは、シゲをまっすぐに見据えて、今度は力強く頷いた。

「冷凍保存には反対だけど、今回は四人一緒だ。僕たちが必ず四人を同時に起こすよ。約束する」

タカも立ち上がって、中央の保存器の前に向かって歩いた。

「さて、長い眠りに入りますか」

「タカ、もう一つ聞いておきたいんだが」

シゲは、タカに近づいた。

「ユウセイのところで聞いた話は、それだけか？」

タカは表情を変えずに一時黙った。脳裏に、シゲの姿にそっくりなユウジがシユウ老人にビルから突き落とされる映像が浮かんだ。口を開いて伝えようかと、喉元まで出掛ったが、飲み込んだ。知らない方がいいこともある。遠い過去の話なのだ。ユウジを殺した張本人がここにいるが、老人だ。どの道、あまり長くはないだろう。今、シゲに伝えても混乱させるだけだと考えた。俺たちの冷凍保存はクボとヒロミが守ってくれる。今はそれ以上考えたくなかった。

開いた唇を一度閉じ、別の言葉を発した。

「それだけだよ。あとは何も聞いてない」

シゲは、タカの胸に頭を凭せた。

「オヤスミ、タカ」

タカは、シゲの肩に手を置いた。いつも冷静な判断で皆を引っ張ってきたシゲが小さく震えていた。

「オヤスミ」

シゲは俯いたまま離れると、自分の保存器の中に入った。ずっと黙っていたシユウ老人が近づいて、シゲの身体に数本のコードを付け、口にチューブを咥えさせた。

そして、ゆっくりと扉が閉じられた。

ほんの一週間前、共に地球に帰ろうと、一緒に頑張ったシゲが保存器の中で身動き一つ取らずに立っていた。頭と腰を保存器に固定され、動けないのだが、それだけではなかった。何かを諦めたよう

な少し沈んだ静かな表情で、じっとしていた。

ヒロミは、唇を噛んで瞬きもせずに見つめていた。シャトルの中で動き回るシゲ。エウロパの基地の中で、現実と向き合いながら判断を下したシゲ。上半身裸で、食堂でごはんをかき込むシゲ。色々思い出しているうちに、涙でシゲがぼやけてきた。手の甲で涙を拭った時に、既にモーター音が鳴っていることに気がついた。シゲの口につながっているチューブが白くなり、開いていた目が閉じられた。麻酔が掛けられたのだ。程なく、保存器自体も白くなり始めた。シウ老人は、タカに近づいた。タカは、保存器の中に入り、シウ老人がそばに来るのを待った。

「ガニメデでの真相。ユウセイに聞きました」

小さな声でつぶやくと、シウ老人の手が止まった。

「見ていたものがいたのか。何故、シゲに言わなかった？」

「過去の話です。今、シゲに伝えてどうなります？俺たちは、マサトとウサを迎えに行くために冷凍保存されるんだ。今はそれしか考えたくないんでね」

シウ老人は一度視線を下に逸らし、深く息を吸ってから黙って作業を続けた。タカもそのまま黙ってされるがままになっている。

準備が完了し、扉に手を掛けた。シゲの保存器の前にいたクボとヒロミが駆け寄ってきた。

「タカっ！」

「あとはよろしく」

タカは口からチューブを外すと、二人にゆっくりと頭を下げた。

「タカ」

言葉を失くした二人が、そのままタカを静かに見つめた。タカは頭をあげるとシウ老人に視線を動かした。手を止めていたシウ老人が、透明な扉を閉めた。鍵の閉まる音が異様に大きく響いた。タカはにつこり笑って「おやすみ」と口を動かした。チューブを再び咥え直し、シウ老人に向かって頷いた。

カチツというスイッチの音の後に続く、低いモーター音。これか

ら何十年と響き続けることになる。目覚めるまで響き続けるその音、ちよつと前までは考えられなかったことに巻き込まれ、動揺する間もなく、振り回された一週間。ヒロミは眠る二人を見つめて、過去を振り返った。

冷凍保存に反対した者達は、殺され、冷凍保存され、保存器を見つめ続ける。

最初の冷凍保存を余儀なくされたマサト。

そして冷凍保存に魅了され、研究に携ったシュウ。

ユウジが殺される様を見て、冷凍保存に反対し冷凍保存を阻止しようとして、私たちを殺そうとしたユウセイ。

そうして、私たちは冷凍保存をめぐる永い時間に巻き込まれた。

二度目の冷凍保存となったマサト。

怪我をして共にエウロパに眠ることになったウサ。

そして、マサトとウサを迎えに行くために眠ることになったシゲ、タカ。

その四人を目覚めさせる役目を担ったクボと私。

たったの一週間で大きく運命が変わった。いや、用意されていた運命なのだ。阻止しようと周りが動いたばかりに、早く動いてしまった。シャトルの打ち上げに成功していたとしても、帰ってきてから、四人は冷凍保存される予定だったのである。どう足掻いても同じ運命を辿っていたのかと思うと、胸が苦しくなった。

何も知らずに暮らしていた一週間前までの生活が懐かしく思える。

戻れない時間。

過ぎてゆく時間。

止まらない時間。

人間は、時間を操れない代わりに、人間の中に流れる時間を操った。

犠牲になった仲間たち。四人は目覚めたときに、幸せと感ずるのだろうか。それとも、後悔するのだろうか。

ゆっくり選択することなく、停止した鼓動たち。

「オヤスミ みんな」

ヒロミは、手を強く握り締めて、小さく呟いた。



暗い暗い

どれくらい時間が経ったのか

紅い紅い

最後に見たのは紅い色

怖い怖い

何も見たくないの

お願い

このまま眠らせて

「ねえ！ここって、これからブレイクする街だってね！今なら安くで来れるけどさー。その内、高くなるよ、きっと。今のうちにここに家でも買っちゃおうか？」

「別荘かー。そうだね。リゾート地としてこれから発展しそうだもんね」

旅行者の若い男女が、新しい綺麗な街の中で、楽しそうに会話をしていた。ここは、木星の衛星であるエウロパ。氷の衛星であった

ことなど考えられないほどに、美しく整えられていた。リゾート地であるこの街は、地球のアンダーグラウンドエイジアによって開発されていた。

そんな街の中心に建つ大きなビルの地下の一室で、眠りから醒めようとしている者がいた。

「麻酔が切れたら、目覚めますので。目覚めたら、呼んでください」  
白衣を着た医師らしき女性が、軽くお辞儀をして部屋から出て行った。室内には、シゲ、タカ、そして眠っているマサトと、ウサ四人がいた。

マサトのベッドの隣には、シゲが座っていた。シャトルの爆発で作られた傷はそのまま、五十年もの月日経ったようには思えなかった。掛けたシャツから少しはみ出して見える肩には、包帯が巻かれていた。シゲは、規則正しく上下する胸をじつと見つめていた。上下する胸に合わせて、すぐ隣に置いてある機械から電子音が規則正しいリズムで鳴っている。

「マサト。約束通り迎えに来たよ」

シゲの言葉に反応せず、電子音だけがシゲの耳に届いていた。

マサトのベッドから五メートルほど離れた所で、ウサは眠っていた。頭には包帯が巻かれ、ネットで包帯を固定されている。顔や身体への傷は目立たなく、包帯していること以外は、五十年前の元気に走り回っていたウサのままだった。そんなウサの手を、タカは握り締めていた。小さな声ですつと話しかけていた。

「ヒルさんから預った新しい恒温服を持って来たよ。地球を出る時にヒルさんに頼んだんでしょ？ 完成していたんだ。今では、あの恒温服を着ても、地球の地上には出れないけど。それから、ヒロミからプレゼントを預ってきてるよ。箱を開けてないから、何が入っているか解らないけど。早く目覚めてよ。ウサの笑う顔を早く見せてよ」

ウサの胸も規則正しく上下していた。時折、溜息のように長い息を吐いて、瞼を強く閉じたりしていた。

「ウサ。早くここから出て、どこか遠くで暮らそうよ。俺たちのことを誰も知らない町で。四人で静かに暮らそう」

「ん　ど、こ　で？」

「ウサっ？」

タカは立ち上がり、ウサの顔を正面から覗き込んだ。

「ウサ！　解るか？　ウサっ！」

ウサは瞳を開けたが、焦点が合っていないようだった。濃い紫色の瞳が、宙を彷徨う。

「タ、カ　どこ　？」

掠れた声で、視線を彷徨わせた。よく見ると、左目の色が右目より少し薄くなっていた。

「ウサ？　ここだ。ここにいる！」

ウサの手をタカの頬に当てた。ウサは自分の手の方角をじっと見つめていた。

「　あれ？　　なんか　変　？」

タカは、コールスイッチを押して医師を呼んだ。間もなく、医師は部屋に入ってきた。

「ウサが目覚めたんですが、俺が見えないみたいで　」

医師は軽く頷くと、瞳にペンライトを当て左右に振った。脳波を測定しているモニタをチェックして、脈拍を測った。一通りチェックすると、タカをウサから少し離れた所と呼んだ。

「爆発に巻き込まれたって言ってたわよね？　左目、少し色が薄いでしょ？　視力を失ってるわ。今の医療なら、見えるようにすることも可能だけど。右目は大丈夫。時間が経てば、視力は戻るはずよ。体調が整ったら、左目をどうするか考えましょう」

ウサには聞こえないように、小さな声でタカに話した。タカは、思いもよらない後遺症を抱えたウサを、黙って見つめていた。

「先生。マサトも目覚めました」

シゲは、マサトが起き上がるうとするのを手伝っていた。

「　何年、経った？」

マサトは、周りの風景を見ながら掠れた声で聞いた。目の前にいるシゲもタカもウサも、表面上は何も変わらないので、時間の経過がわからなかった。

「五十年だ。半世紀も過ぎちまった」

シゲは、静かにはつきりと伝えた。

「え？　ねえ、シゲ！　今の声、シゲでしょ？　今、何て言った？」

ウサは、近くに來たタカにしがみ付きながら起き上がって、声のする方に顔を向けた。

「ウサ、　僕たちは冷凍保存されたんだ」

「う、そ　でしょ？」

「ウサ。本当だよ。ここはエウロパ。ウサはシャトルの発射事故の後　」

「覚えてるよ！　昨日のことでしょ？　エウロパに着陸して、ウサとマサトがシャトルに残って　爆発したの。覚えてるもん！」

目を擦りながら、ウサは大きな声を出した。涙を拭こうとしているのか、視力を戻そうとマッサージしているようにも見えた。

「嘘だもん。そんなに時間進んでないもん」

「本当だよ、ウサ。俺達、爆発に巻き込まれただろ？　地球に帰る体力が残ってなかったから、このエウロパで冷凍保存されたんだ」  
隣のベッドからマサトがウサに話しかけた。

「タカもシゲも　年寄りなの？　そんな声に聞こえないよ」

「俺たちも、地球で冷凍保存されてたんだ」

タカは、まだ目を擦り続けるウサを抱きしめた。

「ウサと、マサトを迎えに来るために、また一緒に暮らせるように、俺たちも冷凍保存で眠っていたんだ」

「ヒロミは？　クボは？　皆も一緒？どこにいるの？」

シゲは、タカに向かって首を振った。一気に伝えるのは、過酷だとしても言いたかったのだろ。タカは頷いて、「また今度ゆっくり話そう」と言って、ウサをベッドに横たわらせた。

「誰か嘘だつて言つてよ」

ウサはシーツを被つて、小さく丸まってしまった。

「嘘だもん！ 信じないもん！」

二日後。右目の視力が戻ったウサは、鏡の前で時間を過ごすことが多くなった。リハビリで歩行訓練を終えると、部屋に戻って鏡の前でじつと自分の顔を眺めていた。

「ウサ？ 昼食の時間だよ。食堂に行こう？」

マサトが、声を掛けても、黙って首を横に振るだけで、食堂に顔を出すことはなかった。タカとシゲが部屋に來ると、ベッドに潜り込み、会話もままならない状態だった。

しかし、その日の夕方。タカがウサとマサトの部屋に來ると、ウサは一人で鏡の前でじつとしていた。

「ウサ？ 食事をしないと駄目だよ？」

ウサはその声が聞こえないように、身動きもせず鏡の中の自分を見つめていた。

「ウサ？」

「ヒロミは？ クボは？ どうして会いに來ないの？」

「ヒロミとクボは ここにはいないよ。二人は冷凍保存にならなかつたんだ。二人共は高齢だから、地球でウサが帰ってくるのを待つてるよ」

ウサは、見えない左目を擦り、右目を閉じた。

「ねえ、どうしてウサを冷凍保存したの？ ウサは、あの時代に あの地球で生きていたいのに」

「あのままだったら、ウサもマサトも死んでいたんだ」

「そりゃ、またタカと暮らせるのは嬉しいけど」

ウサは両目を開けて、鏡に映るタカを見つめた。

「ウサは、あの時代に生きていたの。あの時の地球に色々残してきただよ。戻りたいよ。やりたいこと一杯あるんだもん。友達も、

宝物も沢山置いてきちゃったじゃん！」

「　　ウサ　　」

「やっと、ウサの居場所を見つけたのに！　タカがウサをアングラに連れてきてくれて、ずっとここで生きて行こうって思ってたのに！」

「　　」

「時間がこんなに過ぎたのに、どうして私はこのままなのっ？」

大きな瞳を見開いたまま、叫ぶようにウサは言った。「戻りたいよ」と繰り返し、大きな瞳から大粒の涙がいくつも零れた。

「ごめん　ウサ　本当にごめん　　」

タカは、掛ける言葉を見つけれなくて、項垂れて部屋を出て行った。

扉が閉まる音がすると、ウサは鏡を強く殴って粉々に砕いてしまった。握り締めた拳から、血が滲み出てきた。

大きな音に気づいて、タカが部屋に戻ってきた。

「ウサっ！」

ガラスの欠片の中に手を付いているウサを見て、近くにあったタオルで傷口を強く縛った。

「　　そうだ。ヒロミから預った物をそこに置いてあるんだ。今、先生を呼んでくるから、治療が済んだら開けてみて　　」

タカは、ウサを割れた鏡から離して、ベッドに座らせた。

タカが部屋から出て行くと、ウサは部屋の隅に置いてある箱を開けた。中には、黒いノート型のパソコンが入っていた。形だけ見て旧式と解る。二十一世紀初期の形だった。パソコンの上に、ヒロミからのメッセージが一枚乗っていた。

「ウサへ。」

これを開く時は、ウサが目覚めた時だよね。

きつとエウロパは、私たちが着陸した時から考えられないくらいに発展して、そして私は、お婆ちゃんになっていることでしょう。

生きてるかな？ 生きてるといいな。もう一度、ウサに会いたいもの。

ウサが怪我をして、マサトと一緒にエウロパに残すのを決めた時は、本当に辛かったの。どうしても一緒に地球に戻りたかった。でも、ウサを助けたかったの。だから、エウロパに残すことにしたのよ。タカやシゲを怒らないでね。決して安易に決めたわけではないのよ。確かに短い時間で決断しなければいけなかったけど、最善を尽くしたつもりよ。

同封してあるもの。きつとウサなら一目で解るよね？二十一世紀に普及していたノートパソコンです。研究室のヒルさんがね、骨董品屋で見つけてきたの。動かないやつだけど、ウサにあげたいって「きつと、ウサの好きなデザインだから。目覚めたら渡して」って頼まれたの。インテリアとして飾ってもいいけど、きつとウサなら使えるように改良しちゃうでしょ？ 好きなように使ってね。

それから、私からのプレゼントも入れておきます。ウサの部屋にあった地球の石。それから、シャトルの前で六人で撮った写真です。自分が冷凍保存になったなんて、きつと驚いて動揺していると思うけど、ウサなら新しい時代でも生きていけるよ。シゲも、タカも、マサトも一緒だしね。

アンダーグラウンドエイジアなんかに縛られないで、ウサの思うように自由に生きてね。

追伸 おばあちゃんになった私を見て笑わないでよね。

二二二五年五月 ヒロミより『

涙で文字が霞んで見えた。自分が冷凍保存になったのだということとを、認識しなくてはいけない。どんなに耳を塞いでも時間は戻らないのだ。

手首で涙を拭って、箱の中の物を出した。

ノートパソコンは奥行十五〇ミリ、横二五〇ミリ、厚み十五ミリくらいの大きさで、電源ボタンを押しても反応しなかった。画面に

紙が貼られており、黒いペンで大きく「ウサちゃんへ。こういうの好きでしょ？ ヒルより」と書かれていた。思わず笑みが零れる。ヒルの素っ気無い感じが溢れていた。今にも、目の前に現れて、「改造手伝おうか？」と言つてきそうである。しかし、五十年もの時が過ぎたのだ。ヒルもきつと生きてはいないだろう。パソコンを胸に抱きしめて、ヒルの姿を思い描いた。

箱を覗くと、更に下の方に、丸い石が三つあった。自分の部屋の机の上に飾つてあった地球の石である。外で遊んでいた時に偶然見つけた丸い石。コンクリートで舗装されている地球上では珍しい石。それも、綺麗な形だったので、嬉しくて持つて帰つたのだった。

そして、色あせた写真が出てきた。初めてのシャトルの訓練の前にシャトルの前で撮つた写真。そこでは、六人が笑顔で写っていた。この半年後には、後ろに写っているシャトルで事故に遭い、人生が大きく変わるのである。そんなことは知りもしない過去の自分が、屈託のない笑顔で写っていた。

ウサは、写真を胸のポケットに入れ、パソコンと石と箱に戻した。そして、医師とタカが来る前に、部屋を出た。



マサトは、ビルの屋上でエウロパの街を眺めていた。今、自分のいる環境が信じられなかった。マサトが生まれた頃は、人間は地球以外に住む場所はなく、地球上もあんなに灼熱地獄ではなかった。それもそうだろう。自分の生まれた年から数えると、百十六年も経過したことになる。姿は二十歳代のまま時間だけが過ぎていった。

さすがに二度目ともなると、冷凍保存から目覚めた時のショックは小さかった。いや、一緒に冷凍保存された仲間がいたからだろうか。環境は変わっても、一緒に過ごす仲間が変わらないというのは、それだけでも大きな救いになる。

部屋に残してきたウサのことが気になった。事故にあつて、気が付いたら五十年も経過していたなんて、確かに信じられないだろう。環境が時間の経過を物語つても、それを受け入れるには時間がかかるのは解る。冷凍保存されたと解つていても、抵抗があることなのだ。ウサは冷凍保存を承諾したわけではなかったのだから。気が付いたら五十年も経過していたなんて、可哀想な運命を背負わせてしまった。しかしウサは今、一生懸命現実と向き合っている。何とかして、ウサに笑顔を戻してあげたかった。

丁度その時、ウサが屋上に顔を出した。

「マサト。ここにいたんだ？」

ウサは、ゆっくりとマサトに近づいた。すぐ隣に立つと、胸のポケットから一枚の写真と取り出した。

「見て。昨日のように覚えているのに、こんなに写真が色褪せてるの」

ウサから写真を受け取つて、写真に写る六人を見た。遠い過去の自分。そして、今ここにいる自分。自分の中の時間は止まったまま、周りの時間が過ぎていったのだと強く実感した。

「これ、どこから？」

「ヒロミが、ウサにプレゼントを用意してくれていたの。ヒルさんから骨董品のパソコンと、ヒロミが、この写真と、ウサの宝物を保管してくれてた」

マサトの手から、写真を奪うと、また胸のポケットに戻した。

「ねえ　マサトは、冷凍保存で二度も命を救われてるでしょ？」

嬉しい？」

「嬉しいっていう感情はないけど　。そうだなあ。今回に関しては、救われたよ。ウサもシゲもタカも一緒だから」

「そっか　」

ウサは、ペタンとコンクリートの上に座って、コロニーの天井を見上げた。

「変わったね。地球もいっぱい変わってるんだよ、きっと。ウサは何も変わらないのに。こんなことってあるんだね」

そのまま寝転がって、仰向けになった。

「ウサね。地球に戻る。ヒロミに会うの。自然の時間の流れの中で生きてきたヒロミとお話する。クボのことも聞きたい」

「そうだね。みんなで帰ろう。でもその前に、ウサは　」

「ウサ！　どうして部屋で待ってなかったんだ？」

タカが医師を連れて、屋上に上がってきた。

「あの箱開けたの。写真が入ってて　。マサトに見せたかったから」

「血は止まったの？」

駆け寄って、赤くなったタオルを外した。

「ほら。まだ血が出るじゃん。治療しなきゃ」

マサトもウサの手を覗き込んだ。

「部屋に帰ろう。ウサの左目のことも話さなきゃ」

マサトはウサの手にタオルを巻きなおした。タカがウサを抱えて、階段へ向かう。

「左目」

ウサはベッドの上でぼつりと呟きながら、見えない左目だけを開けて右目を閉じた。薄い紫色の瞳がぼんやりと宙を見つめる。そして、ゆっくりと笑った。

「ウサ。左目の手術のことだけど」

「受けない」

綺麗に包帯を巻かれた右手を見つめて、はつきりと答えた。

「だって、見えないんですよ？」

マサトが隣のベッドから、駆け寄ってきた。

「うん。目の前にあるものは見えないよ」

「じゃあ、どうして？ 生活したり、コンピューター使うのに、両目がないと不便だろ？」

「いいの」

シゲとタカとマサトの三人の説得にも、「受けない」の一点張りで、頑なに首を横に振っていた。

「あのね。左目でしか見えない物があるの。だから、左目はこのままがいい」

そう言って、右目を閉じると、焦点の合わない左目だけを開けて、につこり笑った。

「この左目、気に入ったの」

三人は、それ以上は何も言わず、穏やかに笑うウサを見つめていた。決して奇妙な微笑みではなく、本当に左目で何かを見ているように、やさしく微笑んでいた。

ウサは右目を開けて、タカを見つめた。

「ねえ？ 早く地球に帰ろうよ」

「ウサ？」

「ごめんね、タカ。心配かけて。時間が止まっていたのはウサだけじゃないもんね。ウサはどの時代に生きててもウサだもん」

「うん」

「一度地球に帰って、過去にサヨナラしてくる」

「そう。そうだね。明日にでも帰ろう。ヒロミも待ってるし」

シゲとマサトが頷くを見ると、タカは「手配しておくよ」と立ち上がった。そして部屋の隅にある大きなダンボールをそばに引き寄せた。

「ウサ。もう一つ渡すものがあるんだ。俺がヒルさんから預ってたんだけど」

そう言いながら、ダンボールを開けた。中には、オレンジ色の服が入っていた。

「お願いしていた、新しい恒温服。もう地球上で使うことはできないだろうけど。」「ウサに渡してくれ」ってヒルさんに言われた」

ウサは、俯いて恒温服を直視しなかった。小刻みに首を振って、手を口元に当てている。

「会いたいよ。ヒルさんに、もう一度会いたい」  
もう叶わないであろう願いを、ウサは何度も口にした。

「ヒルさん アリガトウ」

左目だけを開けて、遠くを見つめていた。そこに、ヒルさんがいるかのように。

地球に帰還する四人の目の前に、五十年前とは大きく形が変わったシャトルが目の前にあった。

「これ シャトル？ これ飛ぶの？」

ウサは、何度もシャトルの周りをくるくる歩きながら、シャトルのボディをコツコツ叩いていた。

「こんなに小さいの？ これで、地球まで何日かかるの？」

アンダーグラウンドエイジアの職員が、にっこり微笑んで答えた。  
「約二時間半で地球に着きますよ」

「二時間半！ そんなに早いのか？」

マサトとウサが声を合わせて驚いた。シゲもタカも地球から同じタイプのシャトルに乗ってきたので、もちろん驚きはしなかった。  
「あつという間に着くよ。ワープしているワケではないんだけどね。この数十年で一気に進化したらしいんだ」

シゲは、シャトルの扉を開いてステップを引っ張り出した。最初の中に乗り込んで、上から手を伸ばした。

「ウサ。おいで」

「んっ」

ウサはシゲの手を掴んで、ステップに足を掛けた。シゲが、腕を持ち上げて、ウサを軽々とシャトル内に入れた。

「おおお！」

室内は、ホテルの一室のような作りで、地球⇄木星衛星間を移動するシャトルには見えなかった。

「豪華　っ！　すごいねえ。すごおい！」

ウサは、フカフカのソファの上でスプリングの強度を確かめるように、ピョコピョコ上下に動いた。

「俺の生まれた時代からは、全く考えられない世界だなあ」

ゆとりのある椅子に腰掛けたマサトは、シートベルトを腰に巻きつけながら言った。

「二時間半なんて言わずに、もっと乗っていたいシャトルだね」

ウサは「うんっ！」と頷いて、マサトの隣の椅子に座った。マサトがシートベルトを引っ張り出して、ウサを固定した。

「タカー。旅行みたいだね。すごいね」

上を見ると、ウサの座っている背もたれの上にタカが顔を出していた。

「そっだね　」

ウサが心から楽しんでいる様子を見て、タカとシゲは顔を見合わ

せて笑った。地球に帰ってから「過去にしたくない過去」や、「現実として認めたくない事」が沢山あるだろう。しかし、ウサには前に進んで欲しいのだ。新しい世界で暮らしていかなければならない。この生活に興味を持ち、冷凍保存になったことを忘れるくらいに、楽しく過ごして欲しかった。

そして、それはもちろん自分に対しても言えることだった。自分たちも冷凍保存された身なのだ。自分で決めたこととはいえ、まだ現状を認識しきれない部分もある。しかし、今を生きなくてはいけないのだ。過去に囚われても時間は過ぎてゆくものなのだ。

「出発しますよ」

前方から声がする。エンジン音が聞こえ、窓の外の風景が動き出した。

「あまり、外をじっと見ていると、気分が悪くなりますよ。ものすごい速さで、風景が流れますからね」

パイロットがそう言っても、ウサは窓をじっと見つめていた。

「すごいね。外に何があるのかわかんないよ。すごい速いよ！」

タカは、「酔いそう」と言いながら、目を閉じている。シゲも「

耳が痛いなあ」などと言いながら、マサトにちょっかい出していた。結局、シャトルのスピードに慣れないまま、青い地球が見えてきた。

「地球って、灼熱になっても青いんだね」

みるみる近づく地球を四人は思い思いに見ていた。

「ただいま」

ウサの言葉が、タカ、シゲ、マサトの心に浸透していった。

「マサト！ ウサ！ おかえりなさい」

年老いた女性が、シャトルから降りている四人に近づいた。タカ

とシゲは、挨拶をして、管理棟に向かった。マサトとウサは立ち止まり近づいてくる老人を見つめていた。

「 ヒロミ? 」

「 ああ。ウサ。そんな表情しないで。ヒロミだよ。いいなあ。みんなは変わってなくて 」

ウサは、ヒロミの手を握った。

「 ヒロミ ただいま。プレゼントもらったよ。ありがとう 」

「 プレゼント? えっと何だっけ? 」

「 写真と、石と、パソコン 」

「 ああ。うんうん。そうだ。そんなものを、箱に詰めた記憶があるなあ。だって、五十年くらい前のことよ。私がこっちに戻ってきて、すぐに詰めたから 」

ヒロミは、マサトの方を見て微笑んだ。

「 二度目の冷凍保存。お疲れ様でした 」

「 ああ。二度目でも慣れないものだな、新しい世界には。驚きっぱなしだよ 」

そう言って、空を見上げた。太陽光を遮断する大きな透明の天井が見えた。他の星同様、地球もコロニー内で暮らすようになったようだ。特別な服を着なくても、地球上を歩けるようになったのだ。た。

「 クボも中で待ってるわ。マサトとウサに会いたがってるのよ。元気な二人に会いたいみたい。まだ、罪の意識が消えないようだね。あれから、クボ 変わったわ 」

「 困ったものよ 」とでも言いたげに、首を振った。三人が管理棟の中に入ると、タカとシゲ、そしてクボが待っていた。

「 お帰り。マサト、ウサ 」

シゲに右側から支えられながら、クボはマサトに近づいた。マサトの顔を見て、皺の深い顔をくしゃくしゃにした。

「 本当に 何と言ったらいいのか 」

「 クボ 俺たちは、元気に帰ってきた。それだけでいいじゃない 」

か」

シゲが、クボの背中をばんばん叩きながら言った。ウサも近づいてきて、左側からクボを支えた。

「ウサね、また皆と暮らしたいの。ね？ 楽しく暮らしたいの！」

「ウサ、ごめんね。私たち、もうここでは暮らしていないの。この南棟を出て、普通のマンションで暮らしているのよ。あんまりここに来ることはないのよ。だから、ウサたちが遊びに来てね」

「うん」

「今まで、一緒に過ごせなかった時間を取り戻そう。遊びに行くよ」マサトが言ったその言葉を、クボとヒロミは噛み締めていた。交わることはない五十年の時間を振り返る。

決して戻ることのない時間。

取り戻せることのない時間。

解ってはいても、取り戻せると信じていたかった。

六人だけの、再会を祝うパーティを開き、全員で記念写真を撮った。その写真は、二人の老人と、四人の若者が写っていた。

そして、その日以降、六人が集まることはなかった。

アンダーグラウンドエイジアと、クボに別れを告げて、地球を離れることにした。荷物をまとめて、シゲ、タカ、マサト、ウサの四人は火星行きのシャトルに乗ることにした。

しかしウサが、最後にヒロミの墓に行くと言い出した。



四人でヒロミの墓の前に立つ。

四人の中では、ついこの間まで同じ時間を生きていたヒロミ。そんなヒロミが、今は天寿を全うして土の下に眠る。

不思議だった。

理解はしていても、不思議という感情は消えなかった。

「ヒロミとウサ。どっちが倅せ？」

小さな花をヒロミの墓の前に置き、ウサは誰にというでもなく問いかけた。

それは、共に生きる三人に問いかけたのか。

それとも、土の下のヒロミに問いかけたのか。

マサトは自分に置き換えて考えてみた。

ヒロミとマサト。どっちが倅せ？

二度も冷凍保存され命拾いしたものの、人の手で歪められた時間の中で生きたマサト。

反対に、古来からの自然の摂理のままの時間を過ごし生命の火を燃やし尽くしたヒロミ。

答えはないのかもしれない。

一つだけいえるとしたら、それは

「倅せかは解らないけど、ヒロミが少しだけ羨ましいかな」

ヒロミが笑った気がした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6743a/>

---

エウロパの時間

2010年10月8日15時46分発行